VIEW21

2012 February

2月

高校版

Volume 6

C O N T E N T S

2 私を育てたあの時代、あの出会い

多様な声に耳を傾ける姿から進路指導部のあり方を学んだ

宮城県仙台第二高校◎大澤健史（たけし）

4 特集

新課程先行実施

2012年度入学生の指導に迫る

6 課題整理 成績変動期に着目して指導の見直しを

8 座談会 新課程では学校としての組織力が試される

茨城県立竜ケ崎第一高校◎渡辺隆文（たかのり）／愛知県立五条高校◎河村泰親（やすちか）

熊本県立鹿本（かもと）高校◎白石宏一

12 1年生の指導ポイント 数学 3年間を見通した上で1年生での指導の目線合わせを

14 理科 中学校との接続と内容増への対応が鍵に

15 英語 活動に連続性を持たせ意欲を伸ばす

16 指導変革の軌跡

16 大阪府立八尾翠翔（やおすいしょう）高校

進路指導体制の組織化◎生徒の可能性を信じ組織的な指導で高い目標へいざなう

20 北海道・私立札幌創成高校

指導体制の構築◎「SOSEIシステム」で生徒の帰属意識を育み国公立大合格を目指す

24 鹿児島県立串良（くしら）商業高校

進路保障◎基礎学力の育成と小論文指導の充実で進路の選択肢を広げる

28 30代教師の「転んでも起きる!」

効率的に知識を与える授業から、生物の知識と日常生活を結ぶ授業へ

長野県野沢北高校◎小川智道

30 生きたデータの徹底活用

中学生から高校1年生への自立を促す入学直後の指導

34 未来をつくる大学の研究室

「生と死」にかかわる諸問題に文理融合の視点からアプローチ

東京大大学院人文社会系研究科 一ノ瀬正樹研究室

38 新課程への助走

新課程移行期の課題と実践 ―石川県立七尾高校の事例から―

42 大学選択 新たな視点

学部の枠を超えた連携で学生の視野を広げる大学・学部

48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。

本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

多様な声に耳を傾ける姿から進路指導部のあり方を学んだ

宮城県仙台第二高校 **大澤 健史** OSAWA TAKESHI

生徒の本質に迫り、隠れた可能性を見抜くために、データを深く読み込む。そして校内のさまざまな声に耳を傾ける。どんなに多忙であっても他者に対して常に自分を開き続けた先輩教師からの学びを、大澤健史先生が振り返る。

校務の先の生徒を見る

32歳で県内有数の進学校の宮城県仙台第二高校に勤務することになった私は、教科指導以上に進路指導に不安を感じていました。それまでの赴任校では就職や指定校推薦入試の指導が中心で、模試の成績帳票の見方もよく知らない私に、難関大志望者の指導が出来るのだろうかと思ったのです。そんな私に、進路指導の基本を教えてくださったのが遠藤吉夫先生でした。

私が着任した年、遠藤先生は進路指導部副部長を務めていましたが、授業で接点のない生徒の志望や長所までよく知っていることに驚かされました。生徒の話題を耳にするとすぐに自分の手帳に書き込み、「この大学を勧めたい生徒は？」と誰かが問えば「それならこの二人」と即答するのでした。

遠藤先生は進路指導部のさまざまな仕事を私に与えてくれました。私に出来ることといえば資料作成の手伝いなどでしたが、そうした地道な作業から私は多くを学びました。

一番覚えているのは、志望校検討会用の資料を作り替えたときのことです。学年団の議論がより深まるような資料を作るため、遠藤先生の考えを聞きながら、ときには先生特製のラーメンを夜食にすすりつつ、数週間にわたり新しいフォーマットにデータを入力していきました。

ある夜、一人の生徒のデータを見ていた時のことです。授業の理解が不十分だと私が感じていたその生徒が、実は少しずつですが成績が伸びていて、更にいくつかの教科では良い結果を出しつつあることに私は気付いたのです。私の印象とは異なる生徒の姿がデータから浮かび上がってきた瞬間でした。

興奮気味に遠藤先生に報告すると「知らなかったの？」と何を今更といった表情。生徒は私が気付かぬ可能性を持っていることをその瞬間思い知らされました。そして、データを細部まで追うことでそうした生徒の姿が見えてくることを、遠藤先生との仕事から実感しました。

データの作り方に対する考えも変わりました。それまでは資料は同じ様式のほうが見やすいと信じていましたが、いつも同じ様式だと分析が形骸化することもあるのです。あえて別の角度から生徒に迫る資料を配布するなど、データを重層的に提供していく配慮も進路指導部として必要だと、遠藤先生の資料作りを見て学びました。

あらゆる校務の先には生徒がいる。当たり前のことですが、常に意識しておくことは意外と難しいと私は思います。特に進路指導部の仕事は、教師と生徒の間をペーパーでつなぐことが多いため、多忙な時期は事務処理そのものが目的になってしまいがちです。担任がどんな発見

先輩教師の言葉

他者に対して謙虚であることの大切さを今伝えたい

宮城県白石高校 教頭
ENDO YOSHIO **遠藤吉夫**

大澤先生が着任した当時、仙台第二高校の進路指導は過渡期にありました。豊かなノウハウはあるけれど、データをより現状に合ったものにする時期に来ていたのです。私にとって大澤先生は、進路指導室で夜遅くまで議論し、一緒に作業をしてくれた大切な「仲間」でした。

進路指導は生徒の生き方にかかわるものです。だからこそ、いろいろな見方をすることが大切です。一人の教師として生徒と向き合いながらも、A先生の見方、B先生の見方も自分の中に蓄えていく必要があります。そうして初めて生徒の可能性を広げる指導が出来るのです。

だから私は、情報が集まり

を求めているのか、生徒は担任からどんな言葉をかけてもらいたいのか、そういう発想で資料を作り続けることで、仙台二高の進路指導を支えることが出来るのではないか。進路指導部の副部長となった今、そんな自覚を持って仕事をしています。

進路指導部の姿勢を学ぶ

「あの生徒が合格したの？」と私たちが驚く場面は、少なからずあります。しかし、データをよく見ればそれは必然だったかもしれませんし、もしかすると「やっぱり合格したか」と内心思っている教師もいるかもしれない。自分の知る生徒の姿が全てではないし、生徒は教師の想像を超える速度で成長することを、本校での8年間で学びました。諦めようとする生徒が自分の可能性を再び信じられるか、それが進路指導の難しさでもあり、醍醐味でもあります。

生徒のさまざまな可能性を見つけた遠藤先生ですが、それは他の先生の言葉に耳を傾けたから出来たのだと思います。夕方からは進路室で資料の作成に没頭する先生でしたが、昼間は教室や職員室で生徒や担任の話を聞き歩くのです。自分を常にオープンにして、多様な声を受け入れる姿勢が進路指導部には必要だと先生から学びました。

近年、自分に自信が持てない生徒が少しずつ増えています。生徒に「きみの力はそんなものじゃない」と確信を持って言うためには、自分の思いだけでなく、データと多くの教師の力が必要だ——それが、私が遠藤先生から教わった進路指導です。

右 おおさわ・たけし　化学科。宮城県亘理高校、角田女子高校（現・角田高校）を経て仙台第二高校に。今年度で赴任8年目。進路指導部副部長。

左 えんどう・よしお　国語科。宮城県農業高校、第二女子高校、宮城野高校を経て仙台第二高校に11年勤務。その後、教頭として白石高校へ。

撮影◎仙台第二高校にて

やすくなるよう、周囲の先生が話しやすい状態に自分を置くことを心がけました。常に忙しく振る舞っていると周りの先生は話しかけてくれなくなるからです。進路指導部は情報を発信する機会が多くなりがちですが、聞き役に徹することも実は大切なのです。

東日本大震災によって私たちは自然の脅威を思い知らされ、人間にはコントロールできないものがあることを改めて認識させられました。震災を経験した私は、自分以外の存在に対して謙虚であることの大切さを、これまで以上に生徒に伝えるべきだと考えるようになりました。現代の教育はとかく発信力を重視しがちですが、他者の言葉に耳を傾けることが自分の成長に確かにつながっていくことを、生徒に気付いてもらいたいと思うのです。

人生には、自分の知恵や意思が及ばない瞬間が確かにあります。自分の弱さや小ささに向き合った上で、それでもなお一歩前に出る勇気を生徒に持たせ、後押しする。それが「3・11以降の進路指導」なのではないでしょうか。東北在住の一教師として、今強くそう思います。

SPECIAL ISSUE

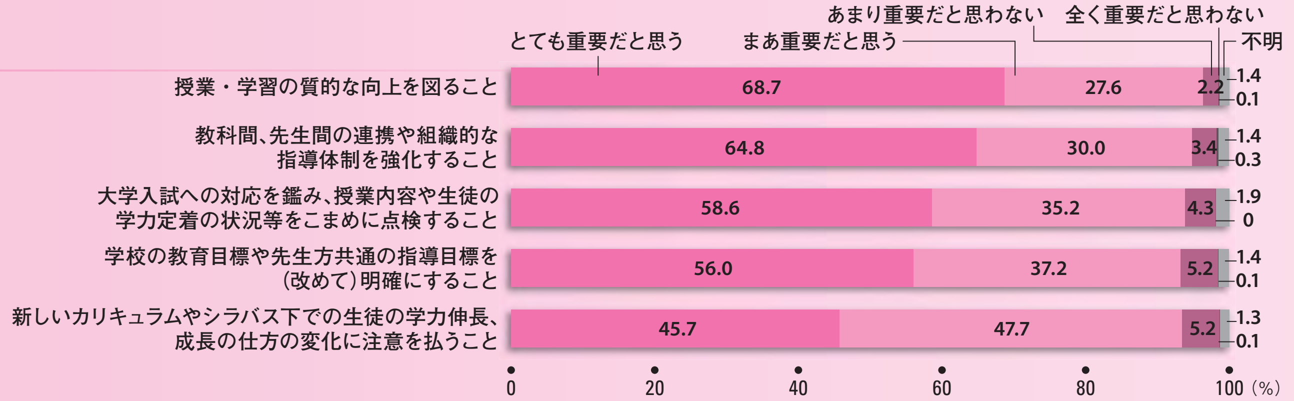
特集

新課程先行実施

2012年度入学生の指導に迫る

中学校での新課程先行実施を受け、増加した学習内容は2012年度入学生にどの程度定着しているのか。入学生の変化を予測し、1年次における進路指導、教科指導のポイントを改めて整理する。

新課程への移行に際し、重要となる観点と、それぞれの「重要度」について



＊「とても重要だと思う」の割合が多い上位５項目を抜粋

出典／ベネッセコーポレーション高校事業部「新課程レポート vol.1 コミュニケーションシート」（調査時期：2011年7月）　n=696校

教師間の連携を強化し、大学入試に向けて**指導の質的向上を図ること**が、新課程でも重要となる

1 予想される2012年度入学生の実態

【P.6 課題整理、P.8 座談会、ベネッセコーポレーション高校事業部「新教育課程に関するアンケート」結果より】

学力面	◎校内での生徒間の学力差がこれまで以上に広がる
	◎出身中学により学習歴の違いや学力差が広がる
気質面	◎「ほどほど志向」は継続する

2 2012年度入学生の指導のポイント

学校全体での取り組み

【P.8 座談会】

中学校との連携などで、生徒一人ひとりのきめ細かな把握を行う

◎基礎学力習得サイクルの徹底
「活用」や「探究」に向けて、夏までに徹底的に基礎学力の定着を図る

◎学習の質を高める工夫
増加した内容に量を増やして対応するのではなく、限られた時間の中で量と質のバランスを取るよう工夫する

◎文理選択の意義を再考
「進路実現のための文理選択」という視点で、文理選択の意味や時期を捉え直す

◎「みんなで1人を育てる」視点を持つ
担任1人に抱え込ませず、学校、保護者、地域と連携して生徒を育てる意識を持つ

茨城県立
竜ヶ崎第一高校
渡辺隆文先生

愛知県立
五条高校
河村泰親先生

熊本県立
鹿本高校
白石宏一先生

教科ごとの取り組み

【P.12 1年生の指導ポイント】

中学校の学習内容で定着している分野、していない分野を見極めて指導を行う

数学	数学Ⅰと数学Aとの関連や、2年生での学習内容とのつながりを踏まえる
理科	科目の組み合わせと文理選択への影響に注意して指導を行う
英語	2013年度の準備として、試行錯誤をしながら授業を模索する一年にする

課題整理

成績変動期に着目して指導の見直しを

生徒の成績変動はどの時期に起きやすく、どのような対策が考えられるのだろうか。現行課程での実態と指導を整理し、新課程における指導の流れを考える。

模試の結果データより指導のポイントとなる時期を抽出

下記の表は、進研模試のデータで、1年生から2年生にかけて成績変動が起こりやすい時期と、その時期の生徒の特徴や、指導のポイントをまとめたものである。

「進研模試の実施時期と成績変動」の欄は、2009年度の1年生総合学力テスト7月から10年度の2年生総合学力記述模試1月を全回受験した生徒、27万2683人のデータを基に、偏差値帯別の成績変動を調べたものだ。前回の模試から偏差値が5ポイント以上上がった生徒の割合を「UP」、5ポイント以上下がった割合を「DOWN」、変動が5ポイント内だった割合を「KEEP」として表した。

データを見ると、成績変動が起こ

1年生

	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月
行事	・中間考査 ・文化祭	・始業式 ・スタディーサポート	・夏休み	・終業式 ・期末考査	・高校総体 ・高校総文祭	・体育祭 ・中間考査	・入学式 ・スタディーサポート
進研模試の実施時期と成績変動				・総合学力テスト7月			

1年生7月→11月

3教科(国語・数学・英語) SS60~70		3教科 SS50~60		英語 SS50~60	
UP	8.2%	UP	12.8%	UP	16.5%
KEEP	70.8%	KEEP	71.9%	KEEP	58.6%
DOWN	21.0%	DOWN	15.3%	DOWN	25.0%

中位層で英語の成績変動が大きい

生徒の状態

9月〜10月
- 学校行事が多く、学力面での差が目立ち始める
- 文理選択を控え、科目選択に悩む

7月〜8月
- 全国模試の難易度に戸惑う
- 夏休み中の学習が計画通りに進まずに焦る

4月〜6月
- 新しい環境で向上心に満ちている
- 授業の進度や学習と部活動の両立に不安を感じている
- 5月の連休明けは疲れが出始める
- 部活動が本格化すると、苦手科目が出始める

指導のポイント

9月〜10月
- 行事後は学習に気持ちを切り替えるためのガイダンスなどを行う

7月〜8月
- 夏休みの学習を計画的にするよう指導
- 夏休み中に学習から離れないよう、補習や課題を通じて生徒の学習を支援する

4月〜6月
- 面談やスタディーサポートなどを使い、生徒把握を行う
- 高校の学習スタイルの定着、家庭学習時間の確保
- 中間考査前後の指導。結果につながる学習計画の立て方を伝える。振り返りを通して、学習習慣の重要性を再度認識させる

8月〜10月
- 中学での「学力貯金」を使い果たし、成績が崩れる生徒が出始める。こまめな声掛けやアドバイスにより学習習慣を再徹底させる

5月〜7月
- 文理選択のガイダンスや調査を通して、進路意識を高め、学習習慣を定着させる

新課程でより重要になる指導ポイント【P.8 座談会より】
- 高校の学習習慣の定着
- 丁寧な生徒把握

＊3学期制の一般的な学校行事を想定して作成
＊成績変動の表は、各時期で特徴的な変動数値を示しているものを抽出して記載

りやすい時期は大きく二つあった。

一つは1年生7月から11月にかけて、特に成績中位層の英語の成績変動が大きい。一定の学習量が必要となる高校での学習方法に転換できたかどうかが、成績に表れているといえそうだ。新課程では、この傾向が加速する可能性もあり、導入期指導での学習習慣の定着が今まで以上に鍵となるだろう。

もう一つは1年生1月から2年生7月模試にかけての時期で、成績中・上位層で成績変動が目立った。学校との接点が少なくなりがちなこの時期は、期末考査後に指導の目線合わせをするなど、次の学年に向けて「切れ目のない指導」を行うことが重要になりそうだ。

2年生から文理に分かれる場合、生徒が苦手教科から「逃げ」ることによって成績の下降につながっていることも考えられる。新課程で数学や理科の学習内容が増えることを考えると、文系生徒の数学や理科の指導方針について目線合わせをすることはより重要になるだろう。

2年生 7月	2年生 6月	2年生 5月	2年生 4月	3月	2月	1月	12月	11月
・終業式 ・期末考査	・高校総体 ・高校総文祭	・体育祭 ・中間考査	・始業式 ・スタディーサポート	・卒業式 ・終業式 ・春休み	・高校入試 ・学年末考査	・始業式	・終業式 ・期末考査 ・文理選択	
・総合学力テスト7月						・総合学力テスト1月		・総合学力テスト11月

1年生1月→2年生 7月
3教科（国語・数学・英語）

	SS60～70	SS50～60
UP	7.2%	7.5%
KEEP	66.9%	71.3%
DOWN	25.9%	21.2%

中・上位層で成績変動が目立つ

1年生11月→1月
3教科（国語・数学・英語）

	SS50～60
UP	12.7%
KEEP	76.6%
DOWN	10.7%

現状維持の生徒が多い

12月～11月
- 文理選択が終わり、進路意識は高まる。一方で苦手科目を諦める生徒も出始める

2月～1月
- 授業日が少ないため、学校の学習から気持ちが離れがちになる

4月～3月
- 2年生に向けて前向きな気持ちに。学習面で仕切り直そうという意識を持つ

7月～5月
- 5月の連休で学習習慣は乱れがちになる
- 高校総体後は部活動の中核になり、学習よりも、部活動に集中する生徒も出てくる
- 進路意識が二極化し始める

3月～12月
- 行事が少ないことを利用し、2年生に向けて学習の見直しを図る。苦手分野の克服にも着手させる
- 3年生の入試状況を伝え進路への動機付けを行うと共に、授業が入試につながっていることを意識させる

5月～4月
- 1年生よりも緊張感が持続しにくいため、中間考査やスタディーサポートを利用し学習にしっかり向かわせる

7月～6月
- オープンキャンパスなどで、進路意識を高め、学習を先送りさせない

12月～11月
- 文理選択を利用し、生徒の意識を将来に向けていく

7月～3月
- 文理に分かれても全教科まんべんなく学習させる指導を継続する。特に私立大文系志望の生徒に数学を諦めさせない指導が重要になる

新課程でより重要になる指導ポイント【P.8 座談会より】
・学習面、進路面でのモチベーションの維持・向上

座談会

新課程では学校としての組織力が試される

2012年度、高校において数学・理科で新課程が先行実施となる。入学生は既に中学校で新課程の数学・理科を学んでおり、内容量の増加による学力差が予想されている。高校ではどのような準備が必要で、受け入れた生徒をどのように育てていくべきなのか。進路指導経験の豊富な3人の先生方に語っていただいた。

「ほどほど志向」で耐性の低い生徒たち

――2012年度の入学生は、これまでの生徒と比べてどのような違いがあると予想されていますか。

渡辺 今の生徒・保護者は共に「ほどほど志向」が強く、上を目指そうという気迫に欠けていると思います。また、中学校でのグループ学習や発表が中心の授業から、進度が速く講義中心の授業に変わることに、対応しきれない生徒が増えているように感じます。今までより学習習慣が身に付いていない生徒も見受けられ、新課程ではこの傾向が加速するのではないかと考えています。

河村 近年の生徒は素直な半面、ストレス耐性が低く、精神的な弱さを感じます。特に本校の場合、第1志望校に届かず悔しい思いを抱いて入学してくる生徒が少なからずいます。勉強や部活動、学校行事などによって達成感を感じさせたり、我慢強さを養ったりして、高校生活の中で生徒の力を伸ばしていくことで、彼らが主体的に大学入試に取り組む力や姿勢を養うことがより大切になると感じています。

白石 生徒を見ていると、「二つの側面」を持っているように見受けられます。教師や大人の前で本音を明かさない子や、目立ちたいけれど地味に振る舞う子、もっと出来るようになりたいけれど表に出さない子。このような気質変化と併せて、学力面でも、中学校での学習内容の増加により、標準偏差がより一層広がることが予想されます。入学前後の時期に、いかに早く生徒の実態を把握し、適切な対策を取るかが、その後の指導を左右すると思います。

導入期指導は「夏までが勝負」

――学力差を広げないための指導のポイントは、低学年においてはどこにあるとお考えですか。

茨城県立竜ヶ崎第一高校
渡辺隆文 Watanabe Takanori
教職歴27年、同校赴任歴9年目。進路指導主事。国語科。
茨城県立竜ヶ崎第一高校◎1900（明治33）年創立／全日制・定時制、普通科、共学／1学年約280人／11年度大学入試実績（現浪計）：国公立大には、東北大、筑波大、東京大などに118人が合格。私立大には、慶應義塾大、早稲田大などに延べ567人が合格。

渡辺 本校では数年前に導入期指導の改革を行いました。その過程で強

愛知県立五条高校
河村泰親 Kawamura Yasuchika
教職歴29年、同校赴任歴19年目。進路指導主事。数学科。
愛知県立五条高校◎1972（昭和47）年創立／全日制、普通科、共学／1学年約320人／11年度大学入試実績（現浪計）：国公立大には、名古屋大、京都大などに202人が合格。私立大には、慶應義塾大、早稲田大、南山大、同志社大などに延べ641人が合格。

く感じたのは、「夏までが勝負」ということです。茨城県では、模試の成績が1年生の夏以降に下がるという傾向が見られ、教師の間ではそれを当たり前と捉える風潮がありました。ところが、導入期指導で学習の仕方や大学入試に対する心構えを徹底的に指導し、更に本校への帰属意識を醸成したところ、1年生の後半以降も成績を維持する生徒が増え、成績上位層が厚くなりました。11年度入試で東京大に合格した生徒は、入学当初は東京大など視野になかったのですが、1年生の夏休みに自分が7、8時間学習できると気付いたことをきっかけに、目標を高く持つようになり、入学時には考えてもいなかった大きな志望を実現しました。難関大への意識付けと併せて、1年生の夏休み前までに学習習慣の定着を図れたことが大きかったと思います。

河村　新課程においても、1年生で学習サイクルを確立することが喫緊の課題となるでしょう。本校では、1年生における国数英の家庭学習の優先順位を①予習、②課題、③復習としています。特に国語と英語は、予習をしなければ授業についていけません。授業が分からなければ、当然、課題も復習も出来ません。課題の量などは、以前は各教科がそれぞれ調整せずに課していたため、時折、期限までに消化しきれない生徒が見受けられる状況がありました。現在は、各教科で分量を調整し、生徒に過度の負担がかからないように配慮し、最後まで出来なかった生徒は学校で取り組ませるようにしています。新課程においても、生徒の状況を見ながら課題や小テストの量を調整したり、個別の指導を工夫したりする必要があるかもしれません。

中学校までの指導を否定しない

白石　元々、学力差のある生徒が入学してくる現実を考えると、1年生で学力幅を一気に縮めるのは難しいと思います。そこで発想を転換して、「学力幅を生かした指導」をすればよいのではないかと考えています。習熟度別授業は2、3年生で行うことが多いと思いますが、例えば1年生で行い、学習の仕方や生活指導も含めて、学力層ごとに育て、それぞれを伸ばしていくという指導も有効ではないでしょうか。教師の負担も軽くなり、生徒にとっても無理なく中学校との接続が図れると思います。このように、新課程では習熟度別授業をどこで活用するのかもポイントになると思います。

熊本県立鹿本高校
白石宏一 Shiraishi Koichi
教職歴12年、同校赴任歴9年目。進路指導主事。数学科。
熊本県立鹿本高校◎1896（明治29）年創立／全日制、普通科、共学／1学年約280人／11年度大学入試実績（現浪計）：国公立大には、大阪大、熊本大、熊本県立大などに87人が合格。私立大には、立命館大、関西大、福岡大などに延べ230人が合格。

河村　ただし、学力層の違いにかかわらず、全ての生徒が身に付けるべきミニマムエッセンシャルズの基礎学力があるという視点は忘れてはいけないと思います。基礎学力を習得するサイクルを身に付けていなければ、次の段階である「活用」「探究」には入れません。また、成績中位層をしっかり押さえておかないと、上位層は伸びませんし、下位層も危機感を感じてくれません。本校では、類型選択（文理選択）を行う1年生の11月頃までに家庭学習の習慣付け

と、苦手科目の克服を目標としています。
上位層は何もしなくても伸びると捉えずに、いつか他の生徒に追いつかれるのではないかという危機感を常に持たせるような工夫も大切です。私は2年生の担任をしていた時、成績上位層にあえて家庭学習時間を2時間までと限定し、その中でどのような学習をすればよいかを生徒自身に考えさせました。時間は際限なくあるわけではなく、受験勉強や社会においても「選択と工夫」が必要なのです。自分で優先順位を決めて効率よく学習する方法を考えさせることで追い込んでいく。このような荒療治も時には必要だと思います。

白石　新課程では、基礎学力定着のため、学習内容が大幅に増えました。それにより詰め込み主義の時代に逆戻りしないよう、いかに指導を工夫すべきかという「脱物量主義」について議論されています。河村先生の「選択と工夫」は、そのための一つの答えを示していると思います。量と質のバランスについても、新課程ではより意識が必要です。

河村　もう一つ注意しなければいけないと思うのは、生徒が中学校でしてきたことを否定しないことです。よく「中学4年生を高校1年生にする」という言い方をしますが、自分たちの経験を真っ向から否定されると、生徒は高校生活に不安を感じ、萎縮してしまいます。高校でリセットする部分と継続していく部分を明確にしておかないと、生徒の意欲を伸ばすことは難しいでしょう。
生徒は高校生になって、通学時間が変わったり、授業では学習すべき量が増え、進度が速くなったりと、さまざまな変化と制約の中でもがきます。そうした生徒の「もがき」をどこまで受け入れ、どこまで受け入れないかということの共通認識を教師間で持っておく必要があるでしょう。

文理選択の時期や方法は適切なのか

――近年、生徒の進路選択のミスマッチが増えていることが課題としてよく挙げられています。なりたい職業から学部を考え、志望校を決めるという、従来の進路選択の方法が揺らいでいるのではないかとも思えます。新課程を機にミスマッチを解消することは可能でしょうか。

白石　進路のミスマッチは、本校でも大きな課題だと捉えています。どこに原因があるのか調べた結果、文理選択の時期が早すぎるのではないかと思いました。各教科をしっかり勉強していない1年生後半に文理選択を行うことの是非について、改めて話し合う必要があるのかもしれません。

渡辺　逆に、文理分けが遅すぎると、生徒は入試を意識せず、のんびりしてしまいます。勉強に意識を向けさせるために、早めに文理選択をさせてきたという学校側の都合があった面は否めません。ただ、生徒が乗り越えるべきハードルとして、この時期に文理選択が設けられていることにはそれなりの意味があると思います。1年生が学校に慣れて気が緩み始める秋に、文理選択のタイミングで進路を考えてみることは、生徒の進路意識の醸成という観点からも大切なステップになるのではないでしょうか。

河村　私は文理選択の時に「素質と適性」の話をよくします。適性は自分でつくれるけれども、素質次第ではやっても出来ないこともあります。素質を伸ばすのには限界があるけれども、適性は自分自身の努力で伸ばしたり変えたりすることが出来る。生徒にそう伝えるのです。進路学習では、自分の素質を見つけるための「自分探し」の過程で道に迷ってしまう生徒がよくいます。そのた

め、本校では自分の適性を伸ばす「自分育て」を大切にしています。進路実現のために必要な努力をする姿勢を育むためには、1年生の文理選択は決して早すぎるとは思いません。

白石　今の社会は情報が多すぎて、生徒の進路選択の幅が広がりすぎてしまう場合が少なくありません。本来は、将来の志望をある程度絞り込んだ後に、それを実現するためにどのような進路があるのかというように広げて考えることが大切ですが、多くの場合、三つを二つに、二つを一つにというように、どんどん絞り込んでいくことに教師の意識が向いているような気がします。また、文理選択のタイミングだけでなく、なぜこの時期に文理選択をするのか、その意味を教師がしっかり認識しなければ、単に早く受験勉強をさせるためだけの文理選択になり、本当の意味での進路実現にはつながらないと思います。

渡辺　進路行事も定番化しているような気がします。今までずっとやってきたから、他校でも取り入れられているからといった消極的な理由では、形だけの取り組みとなり、単に消化しているだけということになりかねません。新課程を機に進路指導についても今一度立ち止まって考える必要があるのかもしれません。

中学校との連携を強化し よりきめ細かな生徒把握を

――お話しいただいた課題を解決するために、各校はどのような点に留意すればよいのでしょうか。

河村　一つは、保護者との連携の取り方を考えることだと思います。学習と部活動の両立、類型選択など、保護者の協力を得なければならないことは少なくありません。保護者に学校の教育方針を理解していただくことが、進路指導や行事を機能させる上で何よりも重要です。そして、そのためには学校が保護者に対して説明責任を果たすと共に、日頃から情報発信を行って保護者の信頼を得ることが大切です。

白石　本校でも保護者との信頼関係の構築に留意しています。誰よりも子どもに大きな期待をかけているのは、保護者です。しかし、教師は24時間、子どもと一緒にいられるわけではありません。保護者の協力を得ることで、学校では教師が、家庭では保護者が生徒を見守るという役割分担がもっとはっきりするのではないでしょうか。また、担任だけが生徒の責任を抱え込まないよう、学校全体、地域全体で生徒を見ることが重要だと思います。そのような仕組みをつくることの出来た学校が、生き残っていくと思います。

渡辺　加えて、中学校との連携は今後ますます重要になると思います。入学生は中学校の学習内容をどの程度習得しているのか、どのような学習観・進路観を持っているのかということをあらかじめ把握しておくことで、生徒の変化により的確に対応できるようになるはずです。教師自身が生徒の母校に足を運び、中学校ではどのような授業を受けていたのか、どのような環境で育ったのかということを知ることが大切です。

白石　この生徒は「数学が苦手」というだけでなく、「数学のどの分野でつまずいているのか」までを把握することが理想でしょう。保護者や中学校の協力を得て、中学校時代のデータを提供してもらうことも必要かもしれません。どのような悩みを抱えていたのか、教科のどの部分でつまずいていたのかといった学習や生活状況に関する詳細なデータを共有できれば、これまで点と点だった中高の指導が一本の線につながるのではないでしょうか。

河村　校内では、教科間の連携が重要になると思います。数学よりも先に理科総合でベクトルや三角関数が出てきて問題になったことがありました。12年度から数学と理科が先行実施されるのは、両方に関連する内容について、どちらの教科で教えるのか、どのような順序で扱うのかなど、教科間の連携を促す意図があるのではないでしょうか。新課程では、教科指導・進路指導の両面から教師や学校、組織の力が試されているのかもしれません。

――本日はありがとうございました。

3年間を見通した上で 1年生での指導の目線合わせを

数学では、4月からの先行実施で新課程での授業が始まる。各校では、実際に教科書を手にし、履修順序を検討していることだろう。そこで、履修順序や新しく入る分野の注意点などについて、現場の先生にお話を伺い、指導のポイントをまとめた。

新課程では中学校での学習内容が増えたことで、入学生の学力差がこれまで以上に広がっているとの予想もある。生徒はどこが出来て、何につまずいているのか。最初は授業のペースを早くし過ぎず、生徒の理解度を丁寧に見ながら進めることが大切になるだろう。

数学Ⅰと数学Aにはそれぞれ新しい分野が加わるため、科目ごとの進度や履修順序を改めて見直す必要がある。2年生、3年生での見通しも含め、1年生ではどの単元をどこまで深く指導するのかなどを検討しておきたい。

◎数学Ⅰ

「現代社会を生きるための数学」という視点で捉える「データの分析」

「データの分析」は今まで数学で扱ったことのない分野だ。教科書を見ると「標準偏差」「はこひげ図」などが登場し、実社会で使う数学の応用の新しい形を学ぶ場になるといえる。「生活を守る数学（従来の数学）から、現代社会を生きるために必要な数学（データの分析）」という視点で捉えると、授業の進め方が見えるかもしれない。例えば、私立文系の生徒が社会を捉える視点として「データの分析」を深めることも考えられるだろう。

「データの分析」の履修順序は、弊社調査によると最後に置かれる場合が多い（図3）。調査時点では分からなかった学習内容が明らかになった今、改めて履修順序を検討したい。

数学Ⅱへのつながりを踏まえた履修順序に

数学Ⅰも数学Aも、学習内容が学期や学年をまたぐと、定着度が下がる傾向がある。「二次関数」の理解度が他分野の履修にも影響するため、直列履修であれ並列履修であれ、学期をまたがずに、例えば1学期中に終え、夏休みでの演習で定着させるなどの工夫をしたい。

数学Ⅱとのつながりを考えると、「データの分析」よりも、「図形と計量」を数学Ⅰの最後に置き、数学Ⅱの「三角関数」と接続する方法で、生徒の理解を促すのも一案と思われる。並列履修の場合は、数学Ⅰ「図形と計量」と数学A「図形の性質」の履修時期が前後するように組むと、生徒の理解度が上がるのではないかと予想される。

◎数学A

数学Aは分野間の関連性が低いと思われやすいため、授業に流れを持たせ、つながりを感じさせることが指導のポイントの一つだろう。

移行内容にも配慮が必要な「場合の数と確率」

「場合の数と確率」は中学校でも扱う分野だ。しかし、高校では、結果のみを解答するのではなく、その計算や思考過程を示して解答する。高校数学の導入として、生徒の自己流ではなく、論理的に理解させることがポイントとなるだろう。

また、数学Cに置かれていた「条件付き確率」などが入るため、現行

課程の「確率」よりも内容が難しい。時間をかけて指導しなければ定着は期待できないため、学習量が増えた分の時数調整は「場合の数と確率」では難しいといえる。

このように、既存の分野でも1年生での学習内容が変更になる分野は細かく確認していきたい。

指導の速さ深さに目線合わせが不可欠な「整数の性質」

「整数の性質」も新しく加わった分野だ。最大公約数、最小公倍数、互除法など、現行課程であまり指導されていない部分が重視されている。発展問題も含め、学習量や難易度の目線合わせが大切になる。進度については各校の方針があると思われるが、「整数の性質」に時間をかける場合は「図形の性質」の内容や速さを調整することになるかもしれない。

「空間」の取り扱いが「図形の性質」のポイント

現行課程では図形を数式化して扱う方法が中心だったが、新課程の教科書を見ると視覚的・感覚的に理解させようという動きが見て取れる。現行課程では扱っていない「空間」が新課程で復活することで、現行課程で減った空間図形の模型などの具体物を見せる機会を取り入れながら、授業を進めることが求められていると理解したい。特に後半は、「二つの円」「作図」と思考力が要求される内容が多いため、丁寧に指導することも検討したい。

学力層に応じた履修順序も考えられる

数学Ⅱとのつながりでは、「整数の性質」を最後に置くと「式と証明」につなげやすいが、数学が苦手な生徒には、1年生の始めに「整数の性質」を置くと取り組みやすい可能性もある。1学期中にどの単元を終わらせるかがポイントとなり、3学期制であれば学年末考査の内容が増える可能性があることも考慮したい。

数学Ⅰ・数学A共に、履修順序は学期制や定期考査の時期などを考慮し、履修内容が途中で空き過ぎないように、更に、試験によって難易度や出題量に軽重がつき過ぎないように考えることも必要だろう。

図3 直列履修の場合の履修順序

＊黒文字は数学Ⅰ、赤文字は数学Aの分野

数と式→二次関数→図形と計量→データの分析→場合の数と確率→整数の性質→図形の性質	21.8%
数と式→二次関数→場合の数と確率→整数の性質→図形の性質→図形と計量→データの分析	5.7%
数と式→二次関数→図形と計量→データの分析→場合の数と確率→図形の性質	3.6%
数と式→二次関数→図形と計量→データの分析→場合の数と確率→整数の性質	3.0%
数と式→二次関数→場合の数と確率→整数の性質→図形と計量→図形の性質→データの分析	3.0%

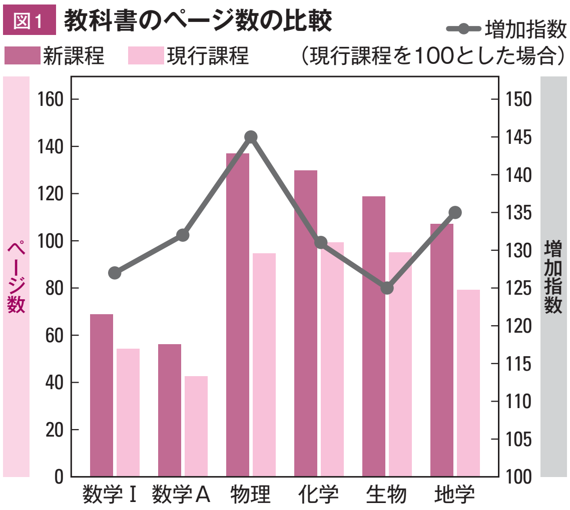
図4 並列履修の場合の数学Ⅰの履修順序

数と式→二次関数→図形と計量→データの分析	85.7%
数と式→二次関数→図形と計量	5.4%
数と式→二次関数→データの分析→図形と計量	2.1%
数と式→図形と計量→二次関数→データの分析	0.4%
その他	1.1%

図5 並列履修の場合の数学Aの履修順序

場合の数と確率→整数の性質→図形の性質	54.4%
場合の数と確率→図形の性質	12.5%
場合の数と確率→図形の性質→整数の性質	7.8%
場合の数と確率→整数の性質	5.8%
整数の性質→場合の数と確率→図形の性質	3.9%

図1 教科書のページ数の比較



＊進研模試調べ
＊各科目教科書（主要）の平均ページ数を、標準単位数で割って算出
＊新課程において新刊された教科書は集計から除外
＊理科は、新課程における「基礎科目」、現行課程における「理科Ⅰ」を表す

図2 数学A（選択履修）の履修分野数

3つ全部履修	56.7%
「場合の数と確率」「整数の性質」	7.0%
「場合の数と確率」「図形の性質」	14.5%
「場合の数と確率」	1.5%
未定・検討中	10.3%

＊図2〜5は、上位5パターンを抜粋　出典／ベネッセコーポレーション進度調査アンケート（調査時期：2010年11月）

1年生の指導ポイント　理科

中学校との接続と内容増への対応が鍵に

1年生での履修パターンはさまざまだが、今回は採用校数が多いとされている「物理基礎＋生物基礎」と「化学基礎＋生物基礎」の2パターンで指導上のポイントを整理する。

中学段階の内容の定着を見る

「物理基礎＋生物基礎」のパターンでは、生徒は1年生で物理を学ぶことで、理工系学部への適性を知ることができ、文理選択を行う際の判断材料が増やせるというメリットがある。

ただし、物理の指導では、中学校との接続という観点で注意が必要になる。例えば、新課程からは「ばね」などの分野が中学校へと移行する。そのため、1年生で物理基礎を履修する場合、中学校での学習内容が定着し、物理的な思考力が身に付いているかを早期に確認しておくと、2年生以降で物理（4単位）を履修するための基礎固めとなるだろう。

ただし、物理基礎は、2単位科目であるにもかかわらず学習内容は決して少なくない。そのため、生徒にも負担感が増すと考えられる。特に、三角関数など数学の中でも物理と関係が深い単元の学習を終えていない場合、理解が追いつかず、物理自体に苦手意識を持つ恐れがある。

そこで、教科書の全てを同じペース配分で行おうとするのではなく、どの単元をどこまで掘り下げるのかを検討することが重要だろう。併せて、数学科の教師と連絡を密に取り、互いの授業で関連分野を補完し合うことも積極的に検討したい。

新課程では、物理同様に数学も履修内容が増えている。理系科目に関心を持っている生徒に過剰な負担感を与えないように、物理と数学の間での連携が一層必要になるだろう。

進路指導面のサポートも必要

「化学基礎＋生物基礎」を1年生で履修するメリットは、最先端の科学技術に対する生徒の興味や関心を持たせやすくなることだろう。バイオテクノロジーなど、近年発展が著しい科学分野に関連する単元を学ぶことは、将来の職業や大学・学部で学ぶ学問を考える上で参考になるはずだ。

ただ、1年生で物理を履修しないため、工学系の進路に対する動機付けが弱くなる恐れもある。「総合的な学習の時間」やホームルームなどを活用して機械工学や電気・電子工学分野の魅力を紹介するなど、進路指導面でのサポートも必要だろう。

また、教科内容の理解という面では、物理基礎を2年生で学ぶことになるため、中学時代に生徒に物理的な素養がどの程度身に付いているかが1年生では確認しにくくなることに注意したい。中学校での学習内容が増えていることを踏まえると、高校物理を学ぶ上で必要な学力や学習意欲に差異が生じている恐れがあることにも留意したい。

中学校段階での物理の基礎が定着している生徒は、数学Iを履修した上で2年生に物理基礎を履修することになるので、内容の理解がよりスムーズになると期待できる。しかし、中学校段階での理解が十分でない生徒にとっては中学校の履修内容の基礎を押さえ直す必要がある。2年生で物理基礎を履修させる場合は、生徒の学力実態をよりきめ細かく把握することが求められるだろう。

1年生の理科の課題は、生徒の負担を増やさずに、どのように効率的に学習内容を定着させるかだ。今回、理科の履修単位を増やし、国語、数学、英語の単位数を減らした学校もあるかもしれないが、1年生ではこの3教科の基礎学力の定着が優先されることが多い。理科では、授業の冒頭で小テストを実施して要点を整理させるなど、学習内容を定着させるよう工夫したい。

1年生の指導ポイント　英語

活動に連続性を持たせ意欲を伸ばす

2013年度から新課程が実施となる英語は、他教科からの影響を受けることはあまりないようだ。12年度は新課程で求められる「英語で授業を行う」準備の年としたい。

授業構成を模索する1年に

2012年度の入学生を指導するに当たり、まず把握しておきたいのは、生徒が中学校でどのような指導を受け、何が出来て、どこでつまずいているかである。中学校では12年度に新課程が全面実施となるが、それを受けて、指導内容や授業の進め方にどのような変化があるのか。中学校で増えた学習内容は、教科書を見るなどして確認する必要があるだろう。

また、11年度中に新課程の伝達講習会は終了しており、校内で新課程での指導について話し合う土壌は出来ている。13年度からの3年間で生徒にどのような力を付けていくのかを共有し、目標達成のためにどのような授業を行っていけばよいか、教科内で検討したい。

生徒の学力に適した活動を

授業構成を考える際に留意したいのは、「英語で授業を行う」といっても、日本語が全く介在しないわけではないということだ。全てを英語で行う授業は、生徒にもある一定以上の力を求めるものであり、相当の集中力が必要とされる。英語での発話を軸としながらも、生徒の理解を助けるために日本語を使用していくことも必要になる。では、どの場面で、どの程度、英語を取り入れるのか。それは学年や時期、生徒の学力によって異なる。自校の生徒にはどのような授業構成が適しているか、生徒の実態を把握しつつ検討したい。

また、活動を単発で終わらせず、1コマ、1単元、1年間、3年間で力が付くように、連続性と目的を持たせるよう工夫したい。1コマの授業を例にすると、レッスンに登場する主な語彙のクイックレスポンスをした後、その単語を使った英語のクロスワードを答えさせ言葉の輪郭を理解させる。レッスン全体をリスニングしながらスラッシュを入れさせ、ペアワークで段落ごとに相互訳をさせる。このように、一つの素材を扱う中で、さまざまな技能を使いながら活動に連続性を持たせ、内容把握につなげる流れも考えられる。生徒は達成感を持つことができ、意欲の向上につながるのではないか。

それぞれの活動にCan-doリストを作ることも有効だろう。例えば、スラッシュリーディングが出来るようになるために、1年生のこの時期に何が出来るようになっていればよいのか。目標到達までのステップを設け、それを基に授業構成を組み立てることも考えられる。

英語を学び続ける姿勢をつくる

授業で生徒が英語で発話をする機会が多くなることから、家庭学習においても音読を促すような指導が有効だろう。発音も予習しておけば、授業で自信を持って声を出せる。併せて、単語を書く練習も行わせ、音声とスペルを結び付けさせたい。

また、1年生の授業で辞書を引く習慣をつけさせ、家庭学習や自律的な学習につなげることも有効ではないか。辞書は自分で疑問に思ったことを解決できる手段の一つである。分からないことがあればまず辞書を引き、それでも分からなければ先生に質問をする。自律的な学習者を育てるための辞書指導も検討したい。

＊理科と英語についても、数学と同様に現場の先生から伺った内容を基に編集部でまとめています

◎大阪府立八尾東高校と大阪府立八尾南高校が統合し、2002年に普通科総合選択制として開校。06年度には、「知的障がい生徒自立支援コース」を設置した。部活動加入率が7割を超えるなど、文武両道を重んじる。

設立	2002(平成14)年
形態	全日制／普通科総合選択制／共学
生徒数	1学年243人
11年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、大阪大、大阪教育大、和歌山大、大阪府立大などに7人が合格。私立大は、同志社大、龍谷大、関西学院大、関西大、近畿大などに延べ262人が合格。

住所
〒581-0885
大阪府八尾市神宮寺3-107
電話
072-943-8107
Web Site
http://www.osaka-c.ed.jp/yaosuisho/

大阪府立
八尾翠翔(やおすいしょう)高校

進路指導体制の組織化

生徒の可能性を信じ組織的な指導で高い目標へいざなう

変革のステップ

背景 STEP 1
◎府立の2校が統合して普通科総合選択制の高校として開校。生徒も教師も実力の限界を決めてしまい志望が高まらない

実践 STEP 2
◎諦めさせない学習指導と、学習規律を守らせる生徒指導を徹底。教師のチームワークを重視して指導体制を整える

成果 STEP 3
◎国公立大をはじめとする大学合格者数が増加。保護者や中学校から、生徒を安心して通わせられる高校としての評価が定着

新しい学校をゼロからつくり上げる

大阪府立八尾翠翔高校は、大阪府立八尾東高校と同八尾南高校が統合再編し、2002年4月に「普通科総合選択制」という新しい高校として誕生した。1年次はどの生徒も共通の履修科目だが、2年次からは「英語専攻」「国語専攻」「社会専攻」「理数専攻」「初等教育専攻」「看護医療専攻」「体育専攻」の7エリアから一つを選び、「エリア指定科目」と「自由選択科目」を組み合わせて履修するカリキュラムとした。

初代の校長は、2校の指導体制を一新し、難関大進学に対応する高校をゼロからつくり上げていく方針を掲げた。まず学力向上を目指し、1コマ45分間×7時間授業とし、朝学習に「教養テスト」を行った。「教養テスト」は毎朝10分間で行う小テストで、内容は英単語や英文法、漢字の書き取りや数学の計算問題などだ。採点は空き時間のある教師が昼休みまでに行い、結果をパソコンで入力。20点満点で16点以上を合格とし、不合格者は放課後、教室に残して合格するまで追試や課題を行った。2学年主任の鳥羽弘美先生は当時を次のように振り返る。

「本校の生徒は、必死に勉強しなくても中学校までは中位の成績を取れていた者がほとんどです。必然的に、学習に向かう姿勢が身に付いていないという課題がありました。そ

こで、何度も繰り返し学ぶことで、まずは学習の型を身に付けてほしいと考えました。『合格するまで帰さない』という徹底した姿勢も、生徒の学習に向かう力を育んでいったと思います。また、部活動が盛んな本校の特色を生かし、不合格になると、放課後の部活動に行けなくなることを伝え、どの部にも『教養テスト』にしっかり取り組もうという雰囲気を醸成していきました」

進路指導課長の中須賀敬子先生は、『教養テスト』の効果を次のように話す。

「これまで学習に真剣に取り組む機会がなかった生徒にこそ、こまめに声を掛けていきました。これにより、生徒は『見捨てられていない』と感じたようです。私自身、遅くまで学校に残ることもあり、くじけそうな時もありましたが、諦めずに頑張る生徒や同僚の先生の姿に勇気をもらいました」（中須賀先生）

学習指導と併せて、生徒指導も徹底した。生徒指導課長の辻光男先生は、その方針を次のように説明する。

「生徒指導は、問題のある生徒のためにするのではなく、生徒を支援し伸ばすために行うものです。学習指導と生徒指導を別物と考えず、両輪として捉えることによって生徒の希望進路を実現させようという考えです」

特に徹底させたのは、携帯電話の校内持ち込み禁止だ。生徒が校内で携帯電話を持っているのを見かけたら、例外なく没収し、後日、保護者に返却する。

「服装の乱れや携帯電話の持ち込みは、生徒、教師双方の授業への集中を乱すことにつながります。当たり前のことの徹底こそが学習の効果を高めるのだと信じ、指導を続けました」（辻先生）

入学前の合格者登校日と入学式の2回、こうした学校での生徒指導上のルールをきちんと説明しているため、保護者からの苦情などはほとんどないという。

限界を決めず 生徒の力を信じる指導に転換

学習指導と生徒指導を厳しく行ったことにより、地域の中学校や中学生の保護者には「子どもを安心して通わせられる高校」という評判が広がっていった。しかし、創設期には、まだ乗り越えるべき課題があった。生徒は「自分の力はこの程度」と自ら限界をつくり、教師も進学校への脱皮を果たせるのか半信半疑のまま、改革を進めていたのである。3学年主任の竹内彰先生は次のように振り返る。

「生徒の学力と目標としたい進路には大きな差があると感じました。私立大型の3教科に絞って学習させた方が目の前の生徒の力を伸ばせるのではないかと迷ったこともありましたが、他の先生方に『生徒を信じてみよう』と言われ、心が決まっていきました」

生徒と教師の意識改革としてまず着手したのは、難易度の高い教科書の採用だった。中須賀先生はその意図を次のように語る。

「私は創立3年目に赴任し、英語の授業を

大阪府立八尾翠翔高校
中須賀敬子 Nakasuga Keiko
教職歴29年。同校に赴任して8年目。進路指導課長。「生徒の可能性をとことん信じること、『ほんまもん』を追求していきたい」

大阪府立八尾翠翔高校
辻 光男 Tsuji Mitsuo
教職歴33年。同校に赴任して9年目。首席。生徒指導課長。「社会に出た時に、誰からも信頼され愛されるような生徒を多く育てていきたい」

大阪府立八尾翠翔高校
竹内 彰 Takeuchi Akira
教職歴28年。同校に赴任して9年目。3学年主任。「分からないと諦めてしまえば前に進まない。生徒に諦めさせない指導をしていきたい」

大阪府立八尾翠翔高校
鳥羽弘美 Toba Hiromi
教職歴36年。同校に赴任して9年目。指導教諭。2学年主任。「良いと思ったことは一人でもやり始める」

大阪府立八尾翠翔高校
小林嘉夫 Kobayashi Yoshio
教職歴35年。同校に赴任して10年目。1学年主任。「生徒と楽しく会話をし、生徒と夢を語っていきたい」

担当するうちに生徒の潜在能力の高さを感じました。当時採用していた教科書では、生徒の力を十分伸ばせないのではないかと思い、大阪府の公立高校が採用する教科書を全て洗い出して一覧表にまとめ、本校の生徒の学力を最大限に伸ばすために適切な教科書はどれかを検討しました。教科書の難易度を高めることで、生徒も教師も進学校で学び、教えているのだという意識改革につながりました」

また、3期生の学年主任だった鳥羽先生は、生徒に毎日の学習時間を記録させ、週1回の提出を義務づける「日課表」を始めた。鳥羽先生が学年全員分の学習時間を入力したデータから、学年団は生徒の変化を把握し、「頑張っているな」「最近、どうした?」といった声掛けを行うことに活用している。

「こまめな指導により、生徒は学校を信頼し、自信を付けていきました。そして、生徒の変化が教師の意識を変えていく様子が見て取れました」(鳥羽先生)

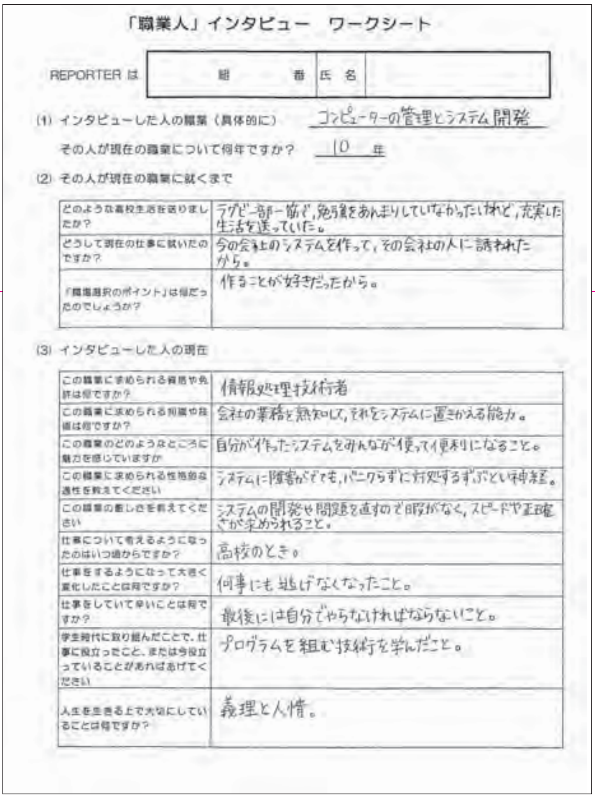
低学年からの指導で社会や将来を考えるきっかけにする

進路指導の体系化にも着手した。まず、入学式前の課題として入学時に「職業人インタビュー」を出す(**図**)。就労者に仕事内容ややりがい、苦労話などを聞いてB4版1枚にまとめ、入学式当日に提出させる取り組みだ。更に、2年次で7つのエリアから自分の進路に合ったエリアを選択させることを見越して、1年次の4月に行う2泊3日の宿泊研修では、2年次で自分がどのエリアに進むかを考えさせた上で2年次の仮想時間割を作らせる。

「『職業人インタビュー』も時間割の作成も、将来を考えさせるきっかけになっています。生徒は私たちの思う以上に社会のことを知りません。将来へのアンテナを張り、新聞やテレビを見たり、自分の周りにいる大人の仕事を意識的に調べたりするための訓練にしたいと考えています」(竹内先生)

1年次の2学期にはエリアを決定し、2年次からはエリア指定科目を履修する。以前は必修科目が少なく、生徒の科目選択の自由度の高さが進路選択の幅を狭めてしまうケースがあった。例えば、苦手科目を「捨てて」いたために、国公立大に挑戦すらできないという問題が起きていたのだ。しかし、この10年間でカリキュラムの改善を図り、現在ではどのエリアを選んでも、大学受験に対応できるよう整備した。

図 「職業人インタビュー」のワークシート


「職業人」インタビュー　ワークシート

REPORTER は　組　番　氏名

(1) インタビューした人の職業(具体的に)　コンピューターの管理とシステム開発

その人が現在の職業について何年ですか?　10 年

(2) その人が現在の職業に就くまで

どのような高校生活を送りましたか?	ラグビー部一筋で,勉強をあんまりしていなかったけれど,充実した生活を送っていた。
どうして現在の仕事に就いたのですか?	今の会社のシステムを作って,その会社の人に誘われたから。
「職業選択のポイント」は何だったのでしょうか?	作ることが好きだったから。

(3) インタビューした人の現在

この職業に求められる資格や免許は何ですか?	情報処理技術者
この職業に求められる知識や技能は何ですか?	会社の業務を熟知して,それをシステムに置きかえる能力。
この職業のどのようなところに魅力を感じていますか	自分が作ったシステムをみんなが使って便利になること。
この職業に求められる性格的な適性を教えてください	システムに障害がでても,パニクらずに対処するずぶとい神経。
この職業の厳しさを教えてください	システムの開発や問題を直すので暇がなく,スピードや正確さが求められること。
仕事について考えるようになったのはいつ頃からですか?	高校のとき。
仕事をするようになって大きく変化したことは何ですか?	何事にも逃げなくなったこと。
仕事をしていて辛いことは何ですか?	最後には自分でやらなければならないこと。
学生時代に取り組んだことで,仕事に役立ったこと,または今役立っていることがあればあげてください	プログラムを組む技術を学んだこと。
人生を生きる上で大切にしていることは何ですか?	義理と人情。

上図は左面。右面には、「自分にとって働くとはなにか」「現在、興味を持っている職業」などを書き込む欄がある
＊学校資料を抜粋して掲載

指導のPDCAを回す体系的な進路指導体制を構築

進路指導の体系化を進めるために、PDCAサイクルを回すことも重視した。年度始めに各学年で目標を立て、節目ごとに目標と現状を照らし合わせる。これは、生徒の定点観測を可能にするスタディーサポートや模試の全員受験により実現できた。結果の返却後には分析会を、学年発足時や三者面談前には「進路方針確認会」

を開き、目標に対して何が足りないか、どのような手立てが必要かを話し合う。

更に、年度末には学年団全員で目標に対する振り返りを行い、そのまとめを進路指導課に提出する。この各学年の総括を基に、進路指導課で総括会を開き、次年度に向けた改善点を洗い出し、運営委員会を経て、職員会議で検討する。

また、進路指導課、各学年主任、首席（＊）による学年主任会議と、学年主任、進路指導課による3年進路連絡会議を、それぞれ週1回、時間割に組み込んでいる。指導の効果検証を定期的に行い、学校全体の足並みをそろえるためだ。

「取り組みを単体で終えるのではなく、一つひとつ検証する場を設けて、次の手を考える必要があると思いました。進路指導課と学年団が密に連携を取り、全ての教師が同じ目線で指導しやすい環境づくりにつながっていると認識しています」（中須賀先生）

全国何十万人の受験生と同じ土俵に立たせたい

生徒の意識を高めると共に、教師にとっても大きな目標としているのが、センター試験の受験率である。その理由を中須賀先生は次のように話す。

「全国で何十万人が同じ時間に同じ試験を受けるセンター試験は挑戦すること自体に意義があると思い、本校の生徒をその土俵に上げてあげたいと考えました。将来、社会人になり、同学年と『センター試験の日は雪だった』『英語が難しかった』といった話題になった時に話の輪に入れることも、大切ではないでしょうか。また、入学後は一般入試も推薦入試も関係なく、さまざまな学生と一緒に学びます。推薦入試で合格している生徒に、『ゴールは大学合格ではない。入学後こそが勝負であり、一般入試を突破して入学した学生に引け目を感じないためにもセンター試験を受けよう』と話すと、一般入試を受ける生徒と共にセンター試験を目指し、最後まで学び続けるようになりました」

このような指導の結果、センター試験の受験者数は、1期生が20人台、2期生が60人台、3期生では目標だった100人を超えた。

諦めない指導を貫きながら生徒の力を伸ばし続ける

3期生は、教師の諦めない指導が結果につながった学年でもあった。国公立大合格者の中にも、2年生の秋までは学習に意欲を見せず、自身の限界を決めて進路も「入れるところでいい」と答えていた生徒がいた。そのような中、当時学年の教科担当だった小林嘉夫先生が、粘り強く向き合い、志望校を問い続けると、「大阪教育大に行きたい」と答える者がいた。そこで、小林先生は数学の課題を渡し、毎日昼休みにきめ細かく指導した。生徒は解ける問題が増えるにつれ意欲的に学習に取り組むようになり、3年生の夏休みからは受験勉強に集中し、見事、志望校に合格した。

「確かに難しい挑戦ではありましたが、私は決して生徒に『無理だ』とは言いませんでした。教師が毎日声を掛けて、指導していけば、生徒もそれに応えようとします。教師が生徒を信じ、生徒自身にも自分の力を信じさせてあげることが何よりも必要だと実感しました。このような先輩の姿を見て、後輩の生徒たちも『自分たちもやれば出来る』という気持ちを抱くようになり、学校は良くなっていくのだと思います」（小林先生）

開校以来、生徒に「無理だ」と言わない粘り強い指導を貫いてきたこと、PDCAサイクルをしっかり回してきたことは、「チーム八尾翠翔」として教師集団の結束力を高めてきた。今後の目標は、生徒の希望進路を実現すると共に、社会人になってからも活躍できる人間を育てることだ。

「今では、遅くまで学校に残って学習し、前向きに志望を語れる生徒が格段に増えました。この信頼関係を維持しつつ、大学入学後も見据えて、生徒を伸ばしていくことこそが、私たちの使命だと考えています」（鳥羽先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2011年9月号指導変革の軌跡「**埼玉県立浦和西高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）

＊大阪府立高校に設置されている教頭と教諭の間に位置する階職

◎2005年度から3年間、文部科学省教育改革推進モデル事業の指定を受ける。校訓は「寛而栗（かんにしてりつ）直而和（ちょくにしてわ）　恵而信（けいにしてしん）」。S選抜コース、特進コース、国際コース、総合コースを擁する。また、部活動にも力を入れ、女子バスケットボール部がインターハイ出場を果たす。

設立	1963（昭和38）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年305人
11年度入試合格実績（現浪計）	国公立大は、北海道大、小樽商科大、室蘭工業大、釧路公立大、公立はこだて未来大、弘前大、高崎経済大、東京学芸大などに17人が合格。私立大は、北海学園大、北星学園大、東洋大、東海大などに延べ131人が合格。
住所	〒001-8501 北海道札幌市北区北29条西2-1-1
電話	011-726-1578
Web Site	http://sosei.jp/

北海道・私立

札幌創成高校

指導体制の構築

「SOSEIシステム」で生徒の帰属意識を育み国公立大合格を目指す

変革のステップ

背景

◎特進コースとしての一貫した指導体制がなく、力のある生徒を伸ばし切れなかった

STEP 1

実践

◎入学時の合宿研修、朝学習、週末課題、模試の徹底活用、勉強マラソンなどコース共通の取り組みを行い、体系化

STEP 2

成果

◎国公立大合格者が増加。生徒が学校に誇りを持つようになり、保護者の信頼感も高まった

STEP 3

過去最高の実績でも「生徒の力を伸ばしきれなかった」

２００６年度の特進コースの卒業生は、札幌創成高校創立以来、最多の国公立大合格者数を記録した。この成果にもろ手を上げて喜ぶ教師もいたが、当時教務部にいた渡辺祥介（よしゆき）先生の表情はさえなかった。

生徒の入学時の学力から考えれば、もっと力を伸ばせたのではないか――。これが、渡辺先生や一部の教師の実感だった。事実、模試の結果を振り返ると、入学時から学力を堅調に伸ばせた生徒はごくわずか。「もっと高い志望を実現させられたのではないか」という思いが渡辺先生の心に湧き、卒業していった生徒たちの顔が浮かんでは消えていった。

「当時の最大の課題は、指導体系が確立していないことでした。学校や特進コースとしての目標や指導方針がなく、学年や教師が独自に取り組んでいる状況でした。そのため、ある学年の取り組みを他学年ではしていないなど、指導が共有されておらず、学年やクラスによって進路結果にばらつきが出ていました。良い取り組みを整理・統合し、どの学年でも生徒の希望進路を実現できる指導体制を構築しなければならないと感じていました」（渡辺先生）

課題を感じていたのは、渡辺先生だけではな

い。数学科主任の西根孝律先生はこう話す。

「本校の生徒の中には、中学時代に能力を十分に発揮できず、自信を持てないまま入学してくる者が少なくありません。彼らの抱える不本意な気持ちや不安と向き合い、生徒の可能性を信じて丁寧に教科指導や進路指導を行うことで、学力や意欲はもっと向上するはずだと考えていました」

改革の必要性を痛感した渡辺先生は、ファインシステム（＊）のデータを使い、生徒の学力を入学時から伸ばせていないことを示して、指導体系の確立の必要性を訴えた。実際、データを見れば、成績上位で入学した生徒でも「家庭学習時間0時間」などと答えている状況で、学力が伸びていない理由は明らかだった。

札幌創成高校
将口 卓 Shoguchi Takashi
教職歴、同校赴任歴共に21年。進路指導部長。「『創成に来て良かった』と卒業式で言ってもらえるよう、あらゆる努力をしていきたい」

札幌創成高校
西根孝律 Nishine Takanori
教職歴、同校赴任歴共に18年。情報システムセンター長。数学科主任。「教師はエンターテイナーであるべき。授業の価値を伝え続けたい」

札幌創成高校
渡辺祥介 Watanabe Yoshiyuki
教職歴、同校赴任歴共に9年。特進選抜センター長。「受験勉強は大学での学習の導入と位置付けて指導する」

06年度卒業生の指導に対して反省点を持っていた教師たちは、この呼び掛けに共鳴し、特進コースの改革に向けて動き出した。

事前・事後の手厚い指導で模試を徹底活用

国公立大合格——これが特進コース改革で掲げた目標だ。それまでほとんど志望者も合格者もいなかった国公立大を目標としたのは、5教科7科目を学習させる必要性を感じていたからだ。進路指導部長の将口卓先生はこう語る。

「生徒は、ともすれば苦手科目を捨てたり、『入れるところでよい』という消極的な進路選択をしがちです。しかし、生きていく中で、苦手なことから逃げ続けることは出来ません。大学進学後にも必要な総合的な学力を身に付けさせることが特進コースの使命だと、この目標によって明確に示しました」

07年度には教務部、進路部、特進コース担任から成るプロジェクトチーム（08年度からは特進選抜センターという分掌）を立ち上げ、「自学自習の出来る体制」「きめ細かな進路指導」から成る「SOSEIシステム」の確立に向けた取り組みを始めた。各学年で効果を上げている取り組みを整理して体系化し、朝学習、週末課題など出来るものから導入した。

力を入れたのは模試の徹底活用だ。これまでも模試は全員受験だったが、当日になって休む生徒、数学が入試科目にないからと途中で帰る生徒などもいた。国公立大を目指す以上、模試は挑戦の場として欠かせないことを認識させ、本当の意味での全科目、全員受験を徹底した。

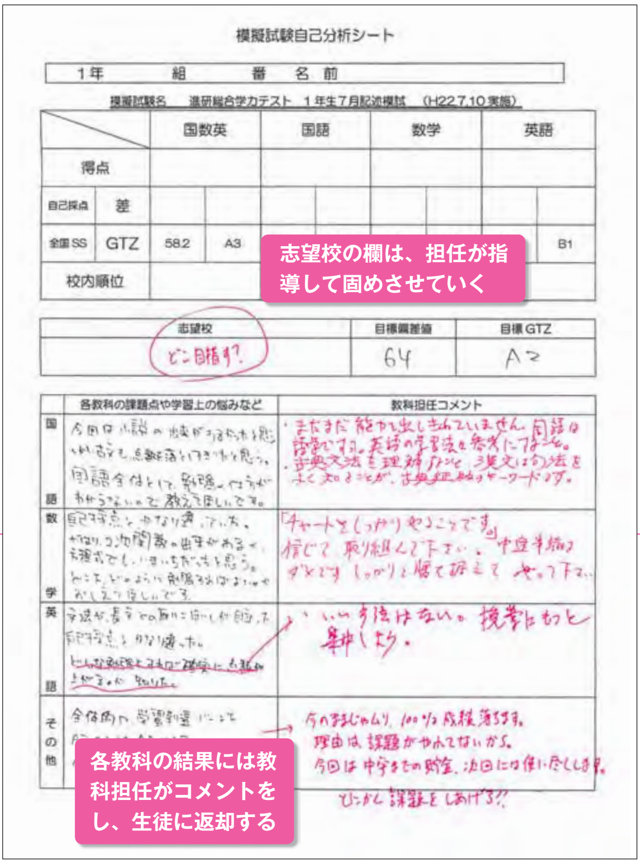
また、事前・事後指導の充実も図った。模試の1か月前に「模擬試験事前準備シート」を配布し、模試に向けた学習計画を立てさせる。担任がチェックし、計画の立て方や学習の仕方、内容などをアドバイスする。更に、授業や補習で模試の過去問に取り組ませ、意識付けを図る。

事後指導は更に綿密だ。結果返却のタイミングで（3年生は自己採点後）、「模擬試験自己分析シート」を配布（P.22図）。各教科の課題や学習上の悩みを書かせ、それに対する具体的な学習方法のアドバイスを教科担任に記入してもらう。「出来なかった」など感想だけの生徒には指導をしながら、書き直しをさせる。生徒の自己分析力を高めつつ、具体的な弱点克服の学習に結び付けることを狙いとした。

他に、全教科で「復習ノート」を提出させる。単に問題を解き直して満点答案を作るだけではなく、模試の問題を徹底して活用するという観点でノートを作る。例えば、国語なら評論文は全て要約を書き、古文は品詞分解や現代語訳を行う。数学は模試受験時には選択していない問題にも取り組ませ、時には別解を書かせて上位層の意欲を喚起するという。「復習ノート」は

＊進研模試や進路マップのデータを基に、個々の生徒の成績の特徴や学年の状況把握につなげられるシステム

図　「模擬試験自己分析シート」



模試が終わると、まず自己採点を行う。約１か月後、模試の結果が返ってきたら、自己採点と得点を比較して差を記入。更に、各教科の課題を自己分析し、学習での悩みを書き込む。それに対し、教科担当はそれぞれアドバイスを書いて、生徒に返す。生徒のコメントで気になることがあれば、返答や励ましを書き込むこともあるという。
＊資料は2010年度１年生のもの。学校資料をそのまま掲載

生徒の基礎学力定着を促すだけではなく、教師の指導改善にもなると、西根先生は話す。

「最初の模試では解答・解説を写すだけの生徒もいますが、こういう生徒に『復習しなさい』とだけ言っても効果はありません。ノートから、生徒がいかに復習の仕方を分かっていないか、どれだけ内容が定着していないかを見取り、指導改善に生かします」

入学直後の宿泊研修で生徒の居場所をつくり、帰属意識を高める

どのような取り組みも、生徒自身がその必要性を感じなければ効果は上がらない。教師が意義を理解した上で、生徒の取り組みへの納得感を高めることも必要だ。

「全ての取り組みには『価値』が必要です。教師が何を言っても、生徒が価値を見い出さなければ耳には入りません。形ばかりの活動を行うのではなく、なぜ必要なのか、生徒の進路実現にどうつながるのかを理解させ、価値を感じさせることが大切です」（西根先生）

入学直後の宿泊研修で特進コースの取り組みの価値を伝えるのは、そのためだ。学習の仕方、模試ノートの作り方などを教え、実際に2、3時間、自習をさせて高校での学習を体感させる。

また、宿泊研修や1年生導入期に実施している放課後補習は、学習習慣の定着だけでなく、生徒の居場所をつくりたいという狙いもある。北海道では公立高校の人気が高く、私立校は併願校と位置付けられることが多いため、生徒の中には「本当はここに入学したくなかった」という不本意な気持ちから学校生活に前向きになれない生徒がいるからだ。

「導入期には、『学校にいて楽しい』という気持ちにさせることが必要です。放課後補習では、最初は効率的に学習できている生徒ばかりではありません。しかし、みんなで学習することによって、学校に自分の居場所があることを認識させ、学校への帰属意識を育み、生徒の顔を学校に向けさせることが何よりも大切だと考えています」（渡辺先生）

「第1志望届」の作成でモチベーションをアップ

導入期指導に次いで節目となるのは、2年生後半だ。入試に向けて目標を定め、受験生としての自覚を持たせたいこの時期に活用するのが「第1志望届」だ。これは、第1志望の大学・学部・学科を記入し、志望理由と決意表明を200〜300字で書き、保護者のコメントをもらって提出するというもの。12月末に用紙を渡し、提出の締め切りは1月末だが、1回目の提出で担

任に受理される生徒はほとんどいない。志望理由が明確でない、将来就きたい仕事から考えると別の進路もあるなど、何度も志望届をやり取りし、志望を固めさせる。担任が了承した志望届は、学年主任、特進選抜センター長、進路指導部長を経て、教頭、校長へと届く。生徒にそれだけの覚悟を持って志望を貫いてほしいという思いと、全ての教師が一人ひとりの生徒を見守っているというメッセージを込めている。

入試に対するモチベーションを高めることが第一の目的だが、冬休みの宿題として課し、保護者との対話を促す狙いもある。

「『第1志望届』を見て、初めて子どもの志望や将来の展望を知る保護者も多いのではないでしょうか。3年生になってから『北海道から出られない』といった話になると、混乱するのは生徒です。事前に家庭の中ですり合わせをして、入試に向けて共に頑張っていく環境づくりを行うことも、進路指導に欠かせないポイントです」(西根先生)

ただし、第1志望を意識させ過ぎると、生徒の視野が狭くなる可能性もある。生徒の意識が偏らないよう、2年生での模試の志望校記入欄には必ず第4志望まで書かせるよう指導している。その際、第1志望しか決まっていない生徒には、北海道内の大学、道外の大学、国公立大、私立大をバランス良く記入させる。

「第1志望に固執し過ぎると視野が狭くなり、入試に必要のない科目は切り捨てるという意識につながりかねません。最終的に第1志望に届かない時でも、すぐに心の切り替えが出来るように志望を広く考えさせておくことも、一方では必要です」(渡辺先生)

「勉強マラソン」で自律的な学びに向かわせる

改革の成果は入試実績にも表れている。07年度卒業生は11人、08年度卒業生では16人だった国公立大合格者は、改革1期生が卒業した09年度、28人に増加した。生徒の学力の伸びを実感するにつれ、当初は改革に後ろ向きだった教師も前向きに取り組むようになった。生徒の変化が教師の心にも火をつけたのだ。だが、何よりの成果は、生徒が学校に誇りを持ち始めたことだ。

「かつては、恥ずかしくて学校名を人に言えないという生徒もいました。これは生徒にとって不幸なことであり、我々教師としても無力さを感じずにはいられないことでした。ここ数年で、ようやく生徒が胸を張って学校名を言える学校になったと思います。進学実績の向上に加えて、生徒が学校に居場所を見つけ、学校への帰属意識や教師への信頼感が増した結果ではないでしょうか」(将口先生)

生徒の意欲の高まりを受けて、特進コース以外から国公立大合格者が出るようになったのも大きな変化だ。コースを超えて生徒が互いに刺激し合い、切磋琢磨する雰囲気が生まれているのである。保護者の信頼感も増し、きょうだいを同校に入学させる家庭が増えた。教師にとってはプレッシャーもあるが、逆にそれが指導改善の励みにつながっている。

今後の目標は、生徒に自律的に学ぶ姿勢を付けさせることだ。それを実現させる取り組みの一つとして、他校の実践に刺激を受け、10年度に始めた「勉強マラソン」がある。朝8時～夜8時までの正味10時間、学校でひたすら自習に取り組むもので、同年に2回、11年は4回実施した。希望制だが毎回70～80人の生徒が参加する。初めて参加する生徒の中には、ため込んだ宿題に取り組むだけの者もいるが、回を重ねるにつれ、大半の生徒が自分には何が必要かを考え、自習内容を工夫するようになるという。

「生徒が黙々と自習に取り組む姿を見ていると、我々の方が勇気付けられます。同時に、こういう生徒がもっと増えれば本校は更に伸びるのではないかと、気持ちを新たにさせられました。今までは学習習慣を付けるために、一方的に課題を与えるだけでしたが、これからは生徒が主体的に学習に取り組む姿勢を育み、自ら課題を見つけて学びに向かえるように育てていきたいと考えています。そうすることで、より高いレベルの進路実現が達成できると期待しています」(渡辺先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年2月号指導変革の軌跡「**愛知県・私立名城大学附属高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ(高校向け)

◎1903（明治36）年に西串良村立農業補習学校として開校。23年に串良実業女学校、50年に現校名に改称。「敬愛・自律・実践」を校訓として、心身共に健康で豊かな人間性を備え、強い意志と創造性、科学性の涵養を目指す。

設立
1903(明治36)年

形態
全日制／情報処理科・総合ビジネス科／共学

生徒数
1学年140人

11年度入試合格実績(現役のみ)
国公立大では、山口大、長崎大、下関市立大、北九州市立大、熊本県立大に合格。私立大は、日本大、九州共立大、九州産業大、西九州大、宮崎産業経営大、鹿児島国際大などに延べ10人が合格。

住所
〒893-1603
鹿児島県鹿屋市串良町岡崎2496-1

電話
0994-63-2533

Web Site
http://www.minc.ne.jp/kushirashoko/

鹿児島県立
串良商業高校

進路保障

基礎学力の育成と小論文指導の充実で進路の選択肢を広げる

変革のステップ

背景
◎少子化による生徒数の減少、求人件数の頭打ちなどにより、学校の特色づくりが求められていた
STEP 1

実践
◎進学と就職の両方を追求し、幅広い進路を保障する進路指導改革に着手。生徒指導の徹底、小論文指導の充実を図る
STEP 2

成果
◎生徒が目標を持つことで学校が落ち着き、国公立大に一定数の合格者が輩出するようになった
STEP 3

場当たり的な生活指導・進路指導に終始

鹿児島県立串良商業高校は、大隅半島の中ほどに位置する鹿屋市串良町にある、同半島唯一の商業高校だ。

同校が古市通前校長主導の下、「進学も就職も出来る学校」を目指す方針を打ち出したのは、2006年のことだった。同町は鹿児島空港から車で約2時間。電車やバスなどの公共交通機関が少ない地域ということもあり、少子化による生徒数の減少は恒常的な課題だった。同校も、ここ数年で5クラスから4クラスに減り、あと1クラス減れば、近隣校との統合再編は避けられない状況となっていた。また、求人件数は頭打ちの状態が続いており、就職実績の飛躍的な向上も望めなかった。

そうした状況においても、校内に改革しようという機運は生まれにくかった。進路指導部主任の古澤聖子先生は次のように語る。

「当時の本校は、就職・進学指導は担任の裁量によるところが大きく、学校として進路をどう考えるのかという視点が足りなかったように思います。本校は資格取得に力を入れており、合格実績は県内でも上位にありましたが、そうした強みを進路に結び付けるという発想がありませんでした。また、生徒の荒れも大きな課題でした。教師の怒号が響くこ

ともあり、一見熱心に指導が行われているようでありながら、その内実は対症療法に終わっていたように思います」

進路指導や生徒指導に一貫性がなく、教師は方向性を探しあぐねている。それが当時の同校の状況だった。

鹿児島県立串良商業高校校長
梶原宏司 Kajihara Koji
教職歴37年。同校に赴任して3年目。「人生は出会い。一人ひとりの生徒を大切にしたい」

鹿児島県立串良商業高校
古澤聖子 Furusawa Seiko
教職歴17年。同校に赴任して6年目。進路指導部主任。「目の前にいる生徒を我が子だと思って接する」

鹿児島県立串良商業高校
福原 健 Fukuhara Ken
教職歴13年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「1年生は挑戦、2年生は我慢、3年生は飛躍。諦めないように指導したい」

鹿児島県立串良商業高校
岩切真美 Iwakiri Mami
教職歴11年。同校に赴任して7年目。進路指導部。「有言実行。やると決めたら、生徒と一緒に必ずやり遂げる」

鹿児島県立串良商業高校
国分信哉 Kokubu Shinya
教職歴10年。同校に赴任して5年目。進路指導部。「率先垂範。情熱を持って生徒と接したい」

今変わらなければ次のチャンスはない 危機意識が指導の一体感を生む

古市前校長が打ち出した進学・就職両面の充実を目指す取り組みを、教師は商業高校の特長を最大限に生かすチャンスと受け止めた。進路指導部の国分信哉先生は次のように語る。

「本校は資格取得で高い実績を上げていますが、生徒の多くは『商業高校＝就職』としか捉えていません。従来通り就職でも実績を出しながら、取得資格を大学の推薦入試などに生かせば、進学も視野に入れることができ、生徒の選択肢は広がります。資格が取れる上に、就職希望者には就職、進学希望者には国公立大進学も夢ではないと、進路の道筋を明確にすれば、本校はもっと魅力ある学校として中学生にアピールできると思いました」

改革に先立ち、対策が急務とされた課題は生徒指導だった。生徒の多くが指定の靴を履かないなど容儀の乱れに加え、遅刻が恒常化し、年間延べ2000件に達していたからだ。

教師は交替で校門指導を行い、毎朝、全校集会を開いて生徒指導を徹底した。校則違反の靴は没収して反省文を書かせ、遅刻が10回に達したら保護者を呼んで説明を行った。ただ指導を厳しくするのではなく、なぜ遅刻はいけないのか、校則を守る意味は何かを、進路と絡めて、生徒に繰り返し伝えた。

その結果、学校の荒れは徐々に収まっていった。遅刻は多い時の3分の1に減少、交通マナーも大幅に改善した。以前は自分さえよければいいという生徒も多く、授業に真面目に取り組む生徒の邪魔をすることもあったが、授業態度も徹底して指導した結果、落ち着いて授業を受けられる雰囲気が出来た。

「我々が『今変わらなければ次はない』という覚悟を持ち、一枚岩になって指導に取り組んだ結果だと思います。指導をただ押し付けるのではなく、進路の観点から指導の意味を伝えることで、生徒は進路にも目が向くようになりました。進路の目標が出来ると、生活も落ち着くというサイクルが生まれたのです」（国分先生）

進学を希望する生徒に 進路決起集会で覚悟を促す

生徒指導に落ち着きを取り戻し、同校はいよいよ基礎学力向上の指導に乗り出した。改革は指導体制の整備から進め、07年に「数英指導係」「小論文指導係」の二つの分掌を立ち上げた。

数英指導係は、専門学校や国公立大の推薦入試に対応する分掌だ。同校で志望者数の多い医療系や経済学系の入試で重視されることが多い、数学と英語の基礎学力を付けるために、早朝補習や夏休み補習などを行った。

小論文指導係は、国公立大の推薦・ＡＯ入試指導の中核を担う。担当するのは国語、地歴公民、商業の教師で、国語の教師が小論文の書き方指導や添削を行い、地歴公民と商業の教師は小論文の内容面で必要な知識を指導する。進路にかかわらず、試験に小論文が必要となる生徒が、希望制で指導を受ける。

指導に当たっては、生徒を10人程のグループに分け、国語１人、地歴公民または商業１人の計２人の教師が一つのグループを受け持つ。グループ分けは、特定の教師に負荷がかからないよう、評定平均値や志望大、資格取得の状況などを勘案し、出来るだけ生徒の力が均等になるように行う。合格が決まれば指導は終了するため、最終的にどのグループも５人ほどになるという。

「進路決起集会」の様子。小論文学習を入試まで毎日続けるための意志を固めさせるため、古澤先生はあえて生徒に厳しい言葉で、小論文指導の内容を説明する

指導は、２年生３学期の「進路決起集会」から始まる（**写真**）。古澤先生が「小論文は、少し勉強したからといって、すぐに書けるものではない。毎日の継続が大切であり、それが出来ない生徒は来なくてよい」と、生徒に揺さぶりをかけて心構えを促す。その気合いにのまれて参加を取りやめる生徒も若干いるが、それでも例年20～30人の生徒が参加を希望する。厳しく覚悟を促すため、指導が始まった後に脱落する生徒はいないという。

自分の考えが相手に伝わる喜びが生徒の書くエネルギーに

小論文指導の柱は、毎日の自宅課題と放課後学習だ。毎日の課題は、図書室の協力を得て、新聞の社説やコラムを進路指導室の前に常備し、200字の要約と200～600字の意見文を書く。意見文の字数は、４月当初は200字だが、400字、600字と段階的に増やしていき、徐々に書く量に慣らしていく。生徒は、放課後にコラムを取りに行き、翌朝のＳＨＲまでに要約と意見文を書いて、担当の教師に提出。これを入試本番まで毎日繰り返す。

この毎日の自宅課題に加えて、放課後にも毎日、小論文指導を行う。小論文模試のテキストやワークブックを使い、環境・情報・生活・科学・文化等に関するテーマ学習を行ったり、自ら課題を設定して400～600字で小論文を書いたりする。必要に応じて、地歴公民や商業の教師が指導や資料提供を行い、小論文を書くために必要な教養や知識を身に付けていく。４月から入試までに書き上げる小論文は、30～50本に及ぶという。

また、ＡＯ入試対策の一環として、グループディスカッションやディベートなども行う。

「話せなければ書けませんし、書けなければ話せません。『書く、話す、聞く』を総合的に取り入れることで、入試や大学進学後の学びに必要な国語力・言語力を高めることを狙いとしています」（古澤先生）

小論文指導のもう一つの特徴は、国語表現Ⅱと関連付けていることだ。国語表現Ⅱは３年生の選択科目として４単位が設定され、小論文指導を受ける生徒は原則、選択することになっている。授業では、要約の仕方、報告書や手紙、自己紹介文の書き方、小説・随筆の執筆まで、あらゆる文章表現について学ぶ。小論文指導の進度に応じて、教科書の内容を入れ替えて授業を行うこともある。国語表現Ⅱで学んだことを、小論文を書いて使うことによって、より実践的な文章作成の技能を習得させるのである。

小論文の作成や国語表現Ⅱの授業を通して、生徒は自身のコミュニケーション能力の向上を

実感しているようだ。

「それまであまり文章を書いてこなかった生徒が、毎日要約や意見文を書くのは容易ではありません。ただ、『大切だと思うところに線を引き、それをつなげれば要約になる』というように書き方をきちんと伝えれば、次第に書けるようになります。また、自分の考えや気持ちを言葉にして人に伝えることで感動を他者と共有することは、全ての人間にとってかけがえのない喜びです。自分の考えや気持ちが相手に伝わる喜びが、生徒の書く原動力になっているようです」（古澤先生）

生徒の「ひらめき」を見逃さず進路指導に結び付ける

同校では、成績上位層を集めて国公立大を目指すという手法は取っていない。あくまでも、商業高校の進路の中心は就職であり、就職実績が維持できなければ進学も保てないと認識しているからだ。学校は生徒の希望に応じて多様な進路を保障するという立場を取り、最終的な決断は生徒に委ねる。

もっとも、生徒が自分の可能性に気付いていないこともあるため、教師は生徒自身には見えていない潜在的な力に気付かせたり、生徒の視野を広げたりすることにも留意する。

商業科の岩切真美先生は、クラスづくりや生徒とのコミュニケーションを通して、生徒の可能性に肉迫していると話す。例えば、以前、岩切先生のクラスに同校始まって以来といわれるほど学力の高い生徒がいた。1年生の時には就職を希望していたが、岩切先生はもっと力を生かせる進路があるのではないかと考えた。2年生で担任になったのを機に、意識的に生徒と話をするうちに、進学か就職かに迷いを感じていることが分かった。岩切先生はそれを見逃さず、進路について共に考え、最終的に進学を薦めたところ、その生徒は在校中に全国高等学校商業協会の8種類の検定試験全てで1級取得や合格を果たし、有名私立大に一般推薦で合格した。

「大切なのは、生徒とどれだけコミュニケーションを取るかだと思います。生徒にうるさいと思われるくらい話し掛けていれば、自ずと生徒の本音が見えたり、本人から話が聞けなくても周囲の友人から情報が得られたりすることがあります。生徒一人ひとりとのコミュニケーションやクラスの輪を大切にすることが、生徒把握の第一歩だと思います。また、生徒が授業中に見せるひらめきをしっかりと捉えることも重要です。情報の授業で誰も考えないようなプログラミングをする、あるいは簿記の計算で、授業では教えていない解き方をする。生徒の非凡な発想を見逃さないことが、進路を広げていく手掛かりになるのです」（岩切先生）

商業高校の使命を果たしつつ生徒の選択肢を広げられる学校に

改革から5年が経ち、生徒の進路実績は徐々に変化している。これまで通りの就職率は維持しつつ、大学進学者が増加し、国公立大に一定数が合格するようになったのだ。生徒の問題行動もなくなり、学校は落ち着きを取り戻した。

更なる学校の発展に向けて、教師の意欲は高まっている。商業科の福原健先生は、今後に向けた決意を次のように語る。

「進学と就職を目標に掲げている以上、教師はどちらの進路指導にも対応できるように指導力を高めていかなければなりません。商業科の教師も資格取得のための指導研究を深め、小論文指導など高度で幅広い知識を身に付けると共に、今まで以上に他教科の先生方との連携を深めることが大切だと感じます」

梶原宏司校長は、商業高校として生徒の希望進路を支えたいと話す。

「本校は商業高校であり、基礎学力に加え、商業の専門教科をきちんと身に付けさせた上で、進学なり就職なりをさせることが大切です。年々高度になる知識や進歩する技術に教師が対応できるように、積極的に大学や産業界との連携を図っていきたいと思います」

自分たちで学校を変えたという自信が、同校を次のステップへと押し上げようとしている。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2011年4月号指導変革の軌跡「**岩手県立水沢工業高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）

30代教師の転んでも起きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！

効率的に知識を与える授業から生物の知識と日常生活を結ぶ授業へ

長野県野沢北高校
小川智道先生 38歳

私が乗り越えてきたもの

進学校の進度を守ろうという焦り

生きとし生けるものを研究対象とし、生命の神秘に迫る学問、生物学。その魅力を生徒の日常に引き付けて解説したいと、教師の道を選びました。

31歳で野沢北高校に赴任した時もその考えに変わりはなかったものの、前任の進路多様校の経験を進学校でどう生かせるかが分かりませんでした。「難関大を目指す生徒たちに応えられる教科指導が、自分に出来るだろうか」という不安を抱いていたのです。

不安を打ち消そうと、私は先輩の授業を参考に、教科書の内容を所定の進度で過不足なく伝える工夫をしました。授業で話す内容は教科書から脱線しないようにし、ノートを見直せば試験対策に直結するよう、板書内容も整理したのです。とにかく授業を先へ先へと進めることに集中していました。

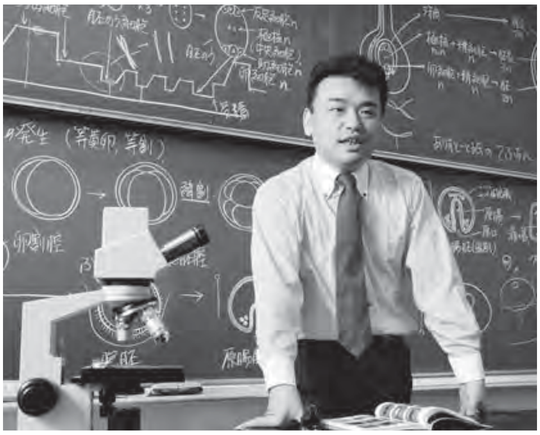
知識を定着させられていなかった

生徒は全員が静かに私の説明を聞き、板書を写していました。そして定期試験の結果も、先輩が担当するクラスの平均点と遜色がなかったため、私は、生徒に力を付けられていると思い込んでいました。

ところが直前に教えた概念や現象を生徒に説明させたところ、自分の言葉で説明できる生徒がほとんどいないことに気付いたのです。定期試験の解答を見返してみると、用語を理解しないまま用いていることによる誤答をする生徒がいることも分かりました。

私は生徒に生物の事象を概念的に伝えられず、暗記に頼った勉強をさせてしまっていたのです。単なる暗記では定期試験で得点できたとしても、本質的な理解には至りません。理解にまで深まっていなければ、難関大の入試で求められる、知識の活用が必要な問題には対応できないでしょう。つまり私は、生徒のためを思いながら、正反対の授業をしていたのです。教師としての力不足を思い知らされました。

暗記に頼った勉強をさせてしまっていた



おがわ・ともみち ◎教職歴13年。同校に赴任して7年目。担当教科は生物。1・3年生担当。
長野県野沢北高校 ◎全日制／普通科・理数科／共学。11年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、一橋大、信州大、京都大などに計108人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大、関西学院大などに延べ273人が合格。

そして、これからも挑み続ける目標

生活に引き付けた授業を追究

「これまでの指導を根本的に見直さなければならない」。そう痛感した私はどこをどう変えるべきかを考えた末、生徒の関心を、生物という教科の持つ本質的な面白さに向けようという結論に至りました。例えば、「体が冷えるとなぜ風邪をひきやすいのか」といった日常生活と密着した話題を、教科書の内容に絡めて必ず話すようにしたのです。まずは生活と深くつながっている意外な事実を伝え、学ぶ意欲を育むことが重要だと考えたのです。

話題を生徒にもっと身近なものに出来るよう、毎回の授業で生徒からの質問を募るようにもしました。そのための用紙を配布し、知りたいことを何でも書くよう伝えたのです。

少しずつ、生徒が自分の身の回りの事物を生物の視点から捉えた質問が見られるようになりました。例えば、「遺伝子組み換え食品の問題点は何ですか」「羽が２枚の昆虫はハエとカだけだと授業で習いましたが、セミの羽も２枚ではないのですか」といった質問が、日に日に多くなっていったのです。

生徒の質問に対して私が解説する時間、つまり定期試験には直結しない話をする時間も増えましたが、どの生徒も退屈そうにしていないばかりか、表情は真剣そのもの。「ここは試験に出るからな」と言った時に寄せられる視線とは異なり、目に知的好奇心が表れるようになったのです。

生徒に考えさせる授業への挑戦

進度を維持しつつ、日常に関連した事象を解説する時間を増やす工夫も重ねました。授業では最重要な内容に絞って解説し、細かな用語説明などはプリントにまとめて配布するのです。

野沢北高校に赴任して７年目の２０１１年度には、捻出した時間を使って、生徒からの質問を紹介した後すぐに私が解説するのではなく、まず生徒に考えさせるようにしています。生徒に意見を聞くと、「ＤＮＡ研究が進むことのメリットとデメリット」など、簡単には答えの出せないテーマにも、既習の知識を組み立てて自分なりの答えを導き出していることが分かります。そうした生徒の姿を見て、最近ようやく、生物に対する関心を高める指導が出来始めたと思えるようになりました。

しかし、教師としてまだまだすべきことはたくさんあります。生徒を引き付ける解説をするには、教師の私がもっと幅広い知識を持たなければならないからです。生物学の最新の研究に目を通すことはもちろん、物理学や化学、更に社会学、歴史学などにも視野を広げる必要性を感じています。これからも、生物の知識と日常生活とをつなげる授業を追究していきたいと思っています。

生物の本質に迫り、関心を高める授業を目指す

小川先生の授業実践 Q&A

Q 生物に対する生徒の関心を高めるために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 毎回の授業で「質問ペーパー」を配布しています。これはＢ７判の用紙で、生徒は私に質問したいことを書いて提出します。積極的に質問してほしいので、内容はあえて生物の領域だけに限定しません。

生徒からの質問は授業で紹介し、私が解説します。一見授業とは無関係に思える質問でも、生物の知識によって解説できるものはなるべく取り上げます。例えば、「あるマンガの登場人物の体表が緑色なのは葉緑体ですか」という質問には、葉緑体で光合成をしていることを前提にするとどのようなことが推測されるかを話しました。

私が解説する前に生徒に考えさせ、意見を聞くこともあります。これまでの学習内容を活用する練習になると考えています。

Q 限られた時数の中で、生徒の興味を引き付ける時間をどのようにつくっていますか？

A 板書量が多くなる単元では、用語解説などをまとめたプリントを作って配布しています。板書に必要な時間を省略し、その分を、生徒からの質問を解説したり、生徒に考えさせたりする時間に充てようという狙いです。

また板書内容は取り上げる質問の内容や生徒とのやりとりによって変わりますが、必要な知識を伝える役割をプリントに担わせることで、授業進度を維持することも出来ます。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す小川智道先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、小川先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

▼

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

中学生から高校1年生への自立を促す入学直後の指導

新課程生 受け入れに向けて

時期の特徴	1年生は5月の連休前後までクラス内での人間関係も固まっておらず、個々の生徒の高校生活に対するモチベーションにも差がある。
指導のポイント	高校生活がどのようなものか模索している段階ゆえに、担任の指導は浸透しやすい。中学校との違いを理解させ、高校での生活リズムを早期につくらせたい。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

対教師へのデータ

生徒把握とクラスとしての自立を軸に導入期指導を構築する

目的別データ活用

1 生徒の内面を含めた実態把握がカギに

……＞ 図1

◎2012年度は、高校でも数学・理科が新課程の先行実施となる。そのため、入学生の学力や学習意欲の変化を早期に把握することが、一層重要となってくる。そこで学力面に関しては、高校入試の結果や入学直後の「スタディーサポート」「進路マップ」などによる把握・分析を行う。更に図1を用いて、入学直後の生徒の高校生活に対するモチベーションにまで踏み込んだ実態把握も重視したい。4、5月の面談を図1を基に掘り下げることで、生徒の内面により深く迫っていくように改善し、高校生活をスムーズに軌道に乗せたい。

2 クラスの自立を促すクラス目標づくりのポイントを共有

……＞ 図2

◎生徒は、集団の中での自分の役割を認識し、それを果たしていく過程で自立していく。クラスを集団として引き上げるために共通の目標を掲げることは、高校生としての自立を促す意味で重要だ。目標は、レベルもさまざまで、担任が決める場合もあれば、生徒たちの話し合いで決まる場合もあるだろう。1年間のクラスの在り方を決める大切な取り組みとして、これまでどのような目標設定が行われてきたか、図2のようにベテラン教師の経験を共有し、学年団で目線合わせしておくと良いだろう。一人の自立だけでなく、クラスとしての自立を促す目標を設定したい。

データを用いた指導の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎入学生のモチベーション把握アンケート（図1）を実施し、入学生の意欲を把握する	◎図1を基に面談を行い、各生徒のモチベーションや気質を掘り下げて把握する	◎ベテラン教師が中心となって図2に記入し、それを参考に定めたクラス目標やクラスづくりの方針を学年団で共有する	◎5月の連休前後に面談を行い、クラス目標や自身の目標への意識を担任が確認し、達成のための取り組みを継続させる

図1 入学生のモチベーション把握アンケートと面談への生かし方

ダウンロード

●高校で挑戦したいこと、やり抜きたいことは？

●高校卒業後の進路目標（行きたい大学・学部など）は？

●平日の放課後の過ごし方は？　計画と現状を記入しなさい

16:00　17:00　18:00　19:00　20:00　21:00　22:00　23:00　24:00　1:00

◎高校生活に対するモチベーションが高い時点で、3年間の目標を明文化させる。第1志望ではなかった生徒には特に注意を払い、高校生活の頑張り次第で大きな成果が出せることを面談で伝えておきたい。

◎生徒の中にはまだ具体的な目標が書けない者もいるので、進路の目標を探すことも、高校生活の大切なテーマであることを面談で話したい。また、書ける生徒にも、幅広く可能性を探っていく必要があることを伝える。

◎実際に高校生活が始まって、当初考えていた通りの生活が送れているか、計画に無理があるならどのように変更すればよいかを面談で確認し、修正させる。計画を守れないまま過ごすことは避けさせたい。

図2 入学生を高校生にするために学年団で共有する「クラスの目標づくりのポイント」

ダウンロード

ポイント	理由	これまでのクラス目標の例
クラス担任として「これだけは譲れない」というこだわりを、クラス目標などで生徒に示す	生徒が自立した一人の人間として自己決定できるようになるには、周囲の大人が生徒と対等な「一人の人間」として自らの意思やこだわりを示すことが有効だ。「担任はこういう人だ」と生徒が理解できるようなこだわりを示す。	「始業時などの挨拶は必ず相手の顔を見て、声を出して行う。出来ない人がいれば何度でもやり直す」（A先生） 「マジメなことを笑わない。一生懸命である仲間を声に出して応援する」（B先生）
達成に向けての努力を褒めることが出来るようなクラス目標を設定する	目標はただ掲げるだけではすぐに形骸化してしまう。目標に向けての努力を担任が日々評価できるような目標とする。やって当たり前ではなく、一定の努力が必要とされる目標を設定することで成長を褒め、更に意欲を高められる。	「授業開始1分前には着席し、静かに先生を待つ」（C先生） 「行事に全力で取り組み、学年1位を1つでもとる」（D先生）
生徒によっては「そんなに大切なことなのだろうか」と思うような担任のこだわりをあえて提示する	目標を「ルールだから」と守る生徒がいる一方でどうしても守れない生徒も出てくる。生徒による反応の違い、個人差を認めた上で、なぜ大切なのか、どうしたら守れるようになるかをクラスで考えることで集団が一つにまとまる。	「後ろのロッカーの上には私物を置かない」（E先生） 「床に、カバンや教科書などの勉強道具を置かない」（F先生）

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

小中学校と高校での教師の違いを理解させる

小中学校の教師は、児童・生徒の前で自分のことを「先生」と呼ぶことが多いようだ。一方、高校教師は一人称に「私」を用いることが多い。これは一人の人間としての言葉を伝えているということで、大人と子どもという関係だけではなく、生徒を一人前として扱っている面があるということだ。教師と生徒の関係性も高校からは変わることを意識して生徒に接したい。

担任としてのこだわりをクラスづくりに利用する

クラス運営で担任が特定の決まり事にこだわりを持ち、HRで繰り返し発信するうちに、生徒によってさまざまな反応が出始める。担任の言動に対する生徒の率直な反応は、実は生徒たちにとって、お互いの価値観を確かめ合う材料にもなる。導入期では特に担任のこだわりをクラスの雰囲気づくりに活用すべく、教師は自分のスタンスを明確に打ち出したい。

高校進学の目的を思い出させ、モチベーションを高める

入学したことで安心している生徒や、不本意な入学で目標が持てていない生徒もいる。高校生活の目標が見えない生徒には、中学生の頃の「高校入学の目的」を振り返らせる。本来の目的を思い出し、足下から目標を築かせることで、今どのように行動すればよいのかが具体的に見えてくる。また、その実現のために担任にどんな支援を望むのか、生徒に考えさせ、引き出したい。

対保護者へのデータ

「高校生の保護者」としてのあり方を目標を通じた交流と事例で理解を促す

目的別データ活用

1 「高校生の保護者」としてのこだわりを持ってもらう

……▶ 図3

◎図３のシートにあらかじめ生徒と担任の目標、こだわりを記入した上で、生徒経由で保護者に配布する。保護者に生徒と担任の考えを知ってもらい、今後のサポートをお願いすることが第一の目標だが、もう一つの狙いは保護者にも「高校生の保護者になった今、これだけは守っていきたい」というこだわりを考えて、シートを通じて宣言してもらうことだ。それぞれの約束事を生徒、保護者、学校のコミュニケーションの材料としていくのだ。保護者とはなかなか対面する機会がないからこそ、互いの考えを伝え合い、関係を強固にしていきたい。

2 学校との距離感を伝え、「高校生の保護者像」の理解を促す

……▶ 図4

◎保護者の高校に対するニーズは近年ますます多様化しているが、その中で「どんな要望を、どのような形で伝えたらよいのか」が分からず、高校とのあるべき距離感に悩む保護者も少なくない。保護者の不安を軽減し、子どもを中心とした良好な関係を築くための材料として、図４のように先輩保護者から寄せられた相談に学校がどのように対応したかをモデルケースとして伝えたい。同じ立場である保護者が抱える不安や悩みを知ることで、高校生の保護者としての心の準備も出来るはずだ。

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎図３に生徒、クラス、担任が決めた目標・こだわりを記入した上で、生徒から保護者に渡す	◎保護者に図３の「高校生の保護者としてのこだわり」を記入してもらい、担任が回収。今後のコミュニケーションの材料とする	◎コピーした図３を保護者に返却し、保管してもらう。保護者懇談や学級通信などで話題にし、関係性を深めていく	◎２年生～卒業生の保護者に協力を依頼し、図４を作成。学校との距離感なども示して、保護者と教師の理想的な関係性を構築する

ウェブサイトからダウンロード！

生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター

http://benesse.jp/berd/

生きたデータの徹底活用 検索 クリック！

HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料がダウンロードできます！

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！　右のウェブサイトでご覧いただけます。

- ●２００７年６月号「１年生１学期の保護者に対する意識付け」
- ●２００８年４月号「１年生を高校生にする意識付け」
- ●２００９年４月号「高校生としての学習習慣を新入生に定着させる」
- ●２０１１年４月号「１年生初めの定期考査前後の意識付け」

図3 高校生の保護者となるための「こだわり」づくりシート

ダウンロード

高校生活のスタートにあたって、子ども、クラス、担任で目標を決めています。高校生の保護者としてこの一年どんなふうに子どもと接したいか、この機会に目標を決めてみませんか？

担任がコピーしてお戻ししますので、1年間見えるところに貼ってください

●子ども自身が決めた目標・こだわり

●担任自身の目標・クラス運営でのこだわり

●クラス全体で決めた目標

●高校生の保護者としてのこだわり（保護者の方がご記入ください）

例）・夕食は決まった時間に食べる　・風呂掃除は子どもにやってもらう
・お互いの1日の出来事を話す　など

図4 学校との関係性を伝える先輩保護者の振り返りシート

ダウンロード

テーマ・出来事	先輩保護者の振り返り（子どもが高1時の悩みや不安）	当時の学校からの回答
毎日の学習	●塾に行かせた方がよいのか迷った。 ●なかなか机に向かわず、テレビの前でダラダラしている子どもにイライラしてしまった。	●学校からの課題と毎日の予習復習で十分です。本校では、授業中心の学習で入試学力も身に付きます。 ●「勉強しなさい！」では子どもは勉強しません。テレビを消すなど、学習できる環境をつくりましょう。
定期テスト	●中学校では考えられなかったような低い成績をとってしまい、子どもと共に落ち込んでしまった。 ●範囲が広く、テスト勉強の負担も大きいようで、本人が疲弊し、自信を失っているようだ。	●高校では同じような成績の生徒が集まっていますが、まだ差は大きくなく、ばん回は十分可能です。 ●短時間の学習では間に合いません。日々の予習復習の継続がカギになることを家庭でも伝えてください。
部活動との両立	●部活動を終えて帰宅すると疲れで全く勉強が出来ないようだが大丈夫かと悩んだ。 ●運動部は終了時間が遅くなり、勉強の時間が少なく、大学入試には不利なのではないかと不安になった。	●体力がついていない高1時はしかたがない部分もありますが、部活動の顧問にも状況を聞いてみます。 ●本校では運動部からも難関大に多数合格しています。部活動で培った集中力が武器になります。
文化祭・体育祭	●何日も学校に残って準備をしているが、そんなに大変なものなのかと理解に苦しんだ。 ●文化祭準備の方針を巡ってクラスメートと意見が合わず、本人も悩んでいるようだった。	●文化祭のクラス発表は本校の伝統であり、生徒が没頭する行事です。ぜひ応援してあげてください。 ●クラスでの人間関係の構築も高校での学びの一つですが、担任として話を聞き、支援していきます。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

「保護者にしか出来ないこと」をしっかりと伝えていく

保護者として子どもとどうかかわるかは、最終的にはそれぞれの家庭の価値観による。だが、食事や睡眠など、規則正しい生活習慣を維持することで子どもの健康を守れるのは保護者だけである。「生活習慣の管理、助言は自分の役目」と改めて保護者自身が役割を認識することが、生徒の学校生活の充実につながっていく。

不満をためさせない配慮が生徒のために必要

保護者が学校や教師について否定的な言葉を言うようになると、生徒は学校を信頼できなくなり、結果的に生徒本人にとって大きな不利益となってしまう。保護者には、学校や教師への不安や不満は子どもにではなく、学校に直接伝えることを求めたい。保護者会で進路指導部などから「担任に言いにくい時はこちらに連絡を」と案内し、学校とのパイプを複数持ってもらうこともポイントだ。

先輩保護者との懇談で高校生活への理解を深める

保護者にとって他の保護者の体験は、子どもや学校との関係を考える上で非常に参考になる。だが、近年は学区の撤廃などが進み、地域単位での保護者の関係性も希薄になっている。保護者会や三者面談の日程を1・2年生でそろえ、1年生の保護者が2年生の先輩保護者と直接話が出来るような場を学校が率先してつくっていくことなどもより重要になるだろう。

「生と死」にかかわる諸問題に文理融合の視点からアプローチ

東京大大学院人文社会系研究科　一ノ瀬正樹研究室

臓器移植や体外受精などの生命倫理、死刑制度、原発事故と放射能、終末期患者のケアなど、人類は生と死にかかわる多くの課題を抱えている。特定の学問だけでは解決できない課題について、哲学・倫理学、宗教学、社会学、医学、生命科学などの幅広い学問分野の英知を結集して解決の方策を探る学問が「死生学」である。東京大の一ノ瀬正樹教授に、死生学と不可分の領域である哲学・倫理学の現状と、死生学のこれからについて聞いた。

フローチャートで分かる一ノ瀬研究室

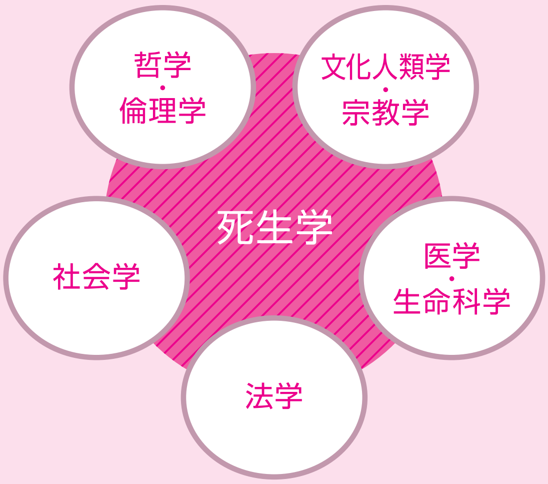
大学院生の主な出身分野

- 文学
- 哲学・倫理学
- 法学
- 歴史学
- 社会学
- 医学・生命科学

など

◎研究者それぞれの専門分野は、文学、哲学・倫理学、歴史学、法学、美術、医療、保健経済、医学・生命科学と幅広い。

研究にかかわる学問分野と研究内容



◎死生学は哲学·倫理学、宗教学、法学、社会学、医学、生命科学などの幅広い分野から、学際的に生と死の問題にアプローチする新しい学問領域である。医療現場における意思決定、精神医療と刑事責任の問題、「看取り」を巡る生命倫理、多様な宗教における死生観、葬送文化など生と死に関する幅広い課題に取り組む。

研究成果と社会のかかわり

- 教育·啓蒙活動
- 人材育成
- ネットワーク化

など

◎生命倫理や死刑・刑罰制度などへの提言、医療従事者へのリカレント教育などの啓蒙・教育活動を行う。また、死生学の専門家やカウンセリングなどに対応できる人材の育成、東アジアを中心とする各国の研究機関との連携などがある。

深く観察できる洞察力が新たな思想へと導く

哲学・倫理学が求める学生像

誰もが当たり前と思っていることに疑問を持てる人

死生学の中でも、私の専門である哲学・倫理学では、人々が当たり前だと思っていることに疑問を投げ掛けることの出来る人が大成すると思います。例えば、私は小学生の頃、算数で「２分の１」と「４分の２」が「同じ」といわれることに、ものすごく抵抗を感じました。半分に割ったリンゴを一切れもらうのと、４分の１に切ったリンゴを二切れもらうのとでは、感覚が全く違うのではないかと思ったのです。算数・数学ではこの二つを同じことだと教えますが、私には簡単には受け入れられませんでした。

単に教えられた通りに答えを解いていくのではなく、本当にそうなのか深く考察できる感性や洞察力が、哲学・倫理学には必要です。民主主義は本当にベストの制度なのか、肉食は正しいことなのか……。当たり前だと思っていることに対して、ひょっとして違う考えもあるのではないかという疑いを持つことが、新たな思想への扉を開くのです。

高校生へのメッセージ　自分はどのような進路に進んだらよいのか、将来何をすべきなのかを見付けられずに悩んでいる高校生は多いと思います。自分で本を読んだり考えたりするのもよいですが、それではタイミングを逃してしまうこともあります。少しでも興味があることに対してはどんどん挑戦していく行動力も、時には必要ではないでしょうか。まずは行動してみましょう。そこから自分の適性や夢、生きがいが見付かることもあるのです。

一ノ瀬正樹 教授 Ichinose Masaki

東京大大学院人文社会系研究科教授。グローバルCOEプログラム拠点リーダー。東京大大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。東洋大助教授、東京大助教授、オックスフォード大客員研究員などを経て、現職。博士（文学）。第10回和辻哲郎文化賞、第6回中村元賞を受賞。主な著書に『死の所有―死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学』（東京大学出版会）、『確率と曖昧性の哲学』（岩波書店）などがある。

研究を志したきっかけ

死刑への疑問から哲学、そして因果性の問題へ

哲学に関心を持ったきっかけは、中学校時代に抱いた死刑制度への疑問でした。死刑判決は遺族にとって一つの区切りになると思いますが、家族を失った悲しみが癒えるわけではありません。それなのに、死刑によって事件が解決されたと見なされるのはなぜなのか、死刑によって社会が変わったり良くなったりするのだろうかと、死刑や刑罰のニュースに接するたびに不思議に思いました。

この疑問を抱えたまま、東京大の哲学科に進んで学ぶうちに、多くの国の刑罰制度が悪の報いによって罰を受ける「因果応報」の思想に基づいていることが分かってきました。私はやがて、原因と結果の関係を探る因果性[1]の問題を追究するようになり、社会現象や科学哲学などの分野へと関心の幅を広げていきました。

大学院時代は物理学にも目を向け、科学的文脈における原因・結果の追究を進めました。また、哲学書を原書で徹底的に読みました。哲学研究を志す者にとって、個々の関心に応じて英語やフランス語、ドイツ語、ラテン語、ギリシャ語などの書物を原文で読み、古今東西の哲学思想の真髄に迫ることが大切だからです。

研究概要

哲学は現実問題にアプローチしてこそ存在意義がある

哲学には、明確な研究対象はありません。考えること、問いを突き詰めることを訓練する学問といえます。事実、哲学で評価される論文は、社会の諸問題に対して具体的解答を提起するものではなく、誰も気付いていないところに明確にすべき問題があることを指摘する論文です。具体的解答も必要ですが、問題を提起すること自体にも意味があるのです。

ただ、日本の哲学の歴史は150年と浅く、これまではカントやデカルトなど特定の哲学者の文献の紹介や分析が中心でした。そのため、日本の哲学者は、現実社会の問題に対してなかなか問題提起をすることが出来ないという側面があります。ただし、文献を読むことで思想の中立性を保ち、自分の考えや日本人の文

化や思想を相対化した上で持論を展開することは大切です。

例えば、福島第一原発の事故に関して、私は専門である因果性の側面から、被曝の影響が分かりにくい低線量被曝[2]とガンの発症や死亡との関係を論じました。被曝と病気の因果関係が明確ではない数ミリシーベルトの放射能を浴びた場合、国や電力会社はどのような対応をすべきか、複数のパターンを示し、法令制定の基準や因果関係の認定の方法、国や電力会社による補償のあり方などについてまとめました。これは慎重に論じるべき問題であり、さまざまな批判を受けるのは覚悟の上で提言をしました。歴史上の哲学者も、その時々の現実に向き合いながら根底に宿る問題を暴き出そうと格闘してきました。日本の哲学者もそうあるべきです。我々の教育のゴールも、膨大な知識を背景に問題提起の出来る人材の育成にあると考えています。

写真　研究室に並ぶ哲学書の数々。原書講読は哲学者の思想にダイレクトに迫る最善の方法である

現在の研究テーマ

最終目標は死生学を固有の学問として確立させること

グローバルCOEの研究テーマ「死生学の展開と組織化」への貢献も、哲学研究室に課された使命です。死生学は、アメリカでは Thanatology（死学）、イギリスでは Death Studies と言いますが、私たちは Death and Life Studies と名付けました。Life の観点を加えたのは他にはない特徴です。

死生学では死生観の研究やターミナルケア、葬送の歴史的・文化的研究、死に関する教育などが行われています。私たちは生命科学や動物倫理などにも対象を広げ、生と死とのかかわりを多角的に研究しています。例えば、死刑問題や刑罰論は従来の死生学ではあまり扱わないテーマですが、私たちは精神障がい者の刑事責任について、脳科学や心理学などの知見も交えて活発に議論を進めています。また、アニマルセラピー[3]や介護犬などにかかわる動物倫理も取り上げています。イルカとの触れ合いは自閉症の治療に効果があることが明らかになっていますが、それがイルカにはストレスにならないのか、効果を数値化しにくいアニマルセラピーを医療にどう位置付けるのか、議論を重ねています。

将来的には、死生学を学んだ人が社会で活躍できる領域を広げることも目標の一つです。心理学を学んだカウンセラーなどが対応する「いのちの電話」、宗教家が定期的に行う死刑囚との面談などにも、哲学・倫理学や生命科学などの知見を備えた死生学の専門家が携わることで違うアプローチが出来るでしょう。

そして最終的には、死生学を学問分野として確立することが我々の目標です。単なる共同研究やデータの蓄積に終わらせず、死生学としての固有の探究方法を見付け、海外とのネットワークを通じて、西洋と一線を画す東アジアならではの死生学を確立することを目指しています。

用語解説

1 因果性
原因と結果の関係のこと。事実に対して適用される場合と、責任を問うような人為的文脈で適用される場合とがある。

2 低線量被曝
自然放射線による被曝は世界平均で年間2.4ミリシーベルト、一般人が日常生活や医療目的以外でさらされる放射線の限度は年間1ミリシーベルトである。低いレベルの放射線を浴びた際に人体にどのような影響が現れるのかは、人によってさまざまであり、福島第一原発の事故以来、活発に議論されている。

3 アニマルセラピー
動物との触れ合いを通して、情緒の安定や生活の充実感を得る活動。あるいは医療現場において動物を介在させる医療方法のこと。イルカ療法、乗馬療法などの他、病院や高齢者施設におけるレクリエーション活動などがある。

4 『正義論』
アメリカの哲学者ジョン・ロールズが1971年に著した政治哲学書。ルソーやカントなどの社会契約の伝統的理論を基に、功利主義に代わる公正の正義を財の分配という観点を中心に説いている。

「死者の危害」を論理的に追究

福間 聡さん
Fukuma Satoshi

東京大大学院人文社会系研究科附属
死生学・応用倫理センター特任研究員
（秋田県立大館鳳鳴（ほうめい）高校卒業）

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 学部時代は明治大で法律を学んでいました。そこで、法律にはさまざまな解釈があり、根源には哲学や倫理学があることに気付き、法律を道徳的・哲学的に考えたいと思うようになりました。明治大では社会思想史のゼミで学び、卒業後は東北大大学院哲学研究科に進んで、本格的に哲学・倫理学を学び始めました。

博士課程修了後、日本学術振興会の特別研究員になった縁で東京大の先生と知り合い、グローバルCOEの公募に応募して死生学について研究を始めました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 最初の研究では、アメリカの哲学者ジョン・ロールズの『正義論』[4]を基に、経済格差が人々の健康格差にも影響するという「社会疫学」をテーマにしました。日本には国民皆保険制度があり、誰でも医療を受けられますが、貧しい人の方が所得の多い人より寿命が短く、病気にかかりやすいことが明らかになっています。人々の健康格差をなくすには、ロールズが唱える「正義」が社会で実現されることが必要であるという仮説を立て、理論的な研究を行いました。

現在は、「死者は危害を受けるのか」というテーマに取り組んでいます。死者への悪口が名誉棄損に当たるとしたら、遺族が危害を受けるから罪なのか、死者も危害を受けているからなのか。また、2009年に臓器移植法が改正され、10年から家族の同意だけで脳死状態での臓器移植が可能になりましたが、本人は望んでいなくても家族が同意して臓器が摘出された場合、本人は危害を受けたことになるのか。私の考えでは、危害は経験的なものなので死者が受けることはないが、悪は被り得るという立場で、死者の危害について論理的に説明しようとしています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 高校時代は、出来るだけたくさんの本や漫画を読み、映画やドラマを見ることをお勧めします。世の中には自分の考えと違う意見がある、自分とは違う考えを持った人がいるということに気付き、その人を理解しようとする姿勢は、これからの時代において特に大切になると思います。小説や映画には作り手の主義・主張や思想、テーマが込められており、それらに接することで異なる意見を知るきっかけになると思います。

私は高校時代、大学入試対策のために読んだ本で社会思想に興味を持ち、大学のゼミで哲学を学ぶきっかけを得ました。「受験のために」と思うと敬遠しがちかもしれませんが、国語の教科書や小論文の試験で出題される文章からでも新しい書籍や思想に出合い、知識や関心が広がっていくこともあります。受験勉強の中にも人生を左右する出合いがあることに気付くことが出来れば、より一層学びに主体的に取り組めるようになると思います。

私の高校時代

真理追究への道は平坦ではないと気付いた

●高校時代は山岳部で活動しました。顧問の先生が頂上での感動を力説されているのを聞き、入部しました。実際の登山は苦難の連続でしたが、山頂に到達した時の達成感、爽快感は先生から聞いた通りでした。大雪山での沢登り、槍ヶ岳頂上からの眺望など、苦しかったからこそ得られる感動を心ゆくまで味わいました。

哲学書を読んでいると登山を思い出します。登山は上りばかりではなく、上り下りを繰り返しながら少しずつ頂上に近付いていきます。哲学の理解もこれと似ていて、分かったと思うとすぐに分からなくなることがあります。分からないと思いながら哲学書を読み進めるうちに、これまで見えなかった景色がぱっと開ける。その快感はまさに登山と同じです。険しい道も、諦めずに上を目指して続けることで高みに達する。そうした期待や希望が、研究の励みになっています。

新課程移行期の課題と実践

― 石川県立七尾高校の事例から ―

10、12月号に引き続き、新課程移行期に特に浮上する課題に対して
どのようにアプローチしているのか、学校事例を通して紹介する。
今号では、生徒把握を軸にして指導の改善を続けている
石川県立七尾高校の事例を取り上げる。

組織的な生徒把握から学校の取り組みを振り返る

『VIEW21』では、特集や当コーナーで新課程移行期の生徒把握の重要性を伝えてきた。左図は当コーナーで掲載した学校の生徒把握の手法をまとめたものである。各時期、各校の状況に応じて有効だと思われる取り組みを考え、生徒の気質の変化を丁寧に捉える体制を構築していきたい。

「新課程への助走」コーナーで紹介した生徒把握の手法

中学校時点での生徒の把握

- 中学校を訪問し、生徒の学力、気質、通学方法などをヒアリング【2011年10月号熊本県立第二高校】
- 塾講師から通塾している中学生の実態を聞く【2011年10月号熊本県立第二高校】
- 小中学校の教師を招いた公開授業研究会を開き、各学校種の状況と入学生の気質を把握【2012年2月号石川県立七尾高校】

導入期段階の生徒把握

- 新入生に「生活進路実態調査」アンケートを実施【2011年12月号大阪府立吹田東高校】
- 学習オリエンテーションで予習を体験させ、それを基にした授業を行い、家庭学習の重要性を実感させる。予習が出来、授業についてこられるかを把握する【2012年2月号石川県立七尾高校】

日々の指導の中での生徒把握

- 「目線合わせシート」で時期ごとの面談テーマをすり合わせ、時期に応じた的確な生徒把握を行う【2011年10月号熊本県立第二高校】
- 生徒→担任へ、担任→学年団・進路指導部へという「二段階の吸い上げ」で、生徒にかかわる全ての教師が生徒把握を行う【2011年10月号熊本県立第二高校】
- 進路マップを活用し、学年の傾向と生徒個々の強み弱みを把握【2011年12月号大阪府立吹田東高校】
- 進路マップの分析結果を「進路指導研修会」で全教師に情報共有し、学校全体で生徒を見取る【2011年12月号大阪府立吹田東高校】
- 「家庭学習時間調査」で教科ごとの学習時間を把握【2012年2月号石川県立七尾高校】
- 「生活・学習実態調査」で、教科のどの分野が分かっていないかなど学習の内容・質について把握し、教科担任による面談で更に詳細な生徒理解を行う【2012年2月号石川県立七尾高校】

学校事例

石川県立七尾高校

生徒の実態は指導の結果と捉え学習時間や意識調査を行い指導の改善に生かす

地域の拠点校として全ての学力層に対応

石川県立七尾高校は能登半島の中央に位置する七尾市にある。能登地方の拠点校として、半島全域から生徒が通う。県内でも有数の進学校ではあるが、地域の過疎化や2006年度入試で石川県の公立高校の学区が撤廃された影響を受け、ここ数年、定員割れが懸念される状況が続いている。そのため、新入生の成績上位層は中学校時代に特に学習をしなくても上位を保っていた生徒がほとんどで、一方、下位層には塾での学習に頼って高校入試を突破したという生徒が目立つ。成績層にかかわらず、家庭学習習慣が身に付いていないことが大きな課題だった。

入学時からこうした生徒の課題を抱えつつ、地域の拠点校として進路実現を支援することが学校の責務であると、進路指導主事の石田秋雄先生は話す。

「生徒が自宅から通える範囲に4年制大はなく、進学すると一人暮らしは必須となるため、費用面においても国公立大志向は強くあります。特に、リーマンショック以降、その傾向は顕著になり、生徒も保護者も将来への不安から資格や職業に直結するような進路先を選ぶ傾向が一層強くなりました。経済的な理由から、国公立大に合格できなければ資格が取れる専門学校に進むという生徒は珍しくありません。生徒の可能性を最大限に伸ばせる進路を実現させるために、学力を付けさせることが更に必要となっていたのです」

同校は、完全学校週5日制となった02年度以降、学習時間の確保という観点から試行錯誤を続けてきた。その結果、大半の生徒に家庭学習習慣が定着し、平日3時間、休日5時間の目標時間を達成するようになったという。03年度に始まった現行課程、県の公立高校の学区撤廃など、その時々の変化に対応しながらつくり上げてきた指導内容を紹介する。

毎日の家庭学習状況から生徒の課題が見えてくる

同校は、家庭学習習慣の定着のためのさまざまな仕掛けを行う。

入学1週間後に行う「学習オリエンテーション」では、家庭学習の重要性を伝えるために、予習の仕方を指導した上で実際に予習に取り組ませ、それを基にした授業を行う。3学年主任の中澤賢（さとし）先生は次のように説明する。

「初めから家庭学習の目標時間は言いません。予習、授業、復習という学習のサイクルを体験させ、国公立大に合格した先輩たちも同じように学習していたことを

石川県立七尾高校
石田秋雄 Ishida Akio
教職歴29年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。

石川県立七尾高校
大西 誠 Onishi Makoto
教職歴26年。同校に赴任して7年目。教務主任。

石川県立七尾高校
中澤 賢 Nakazawa Satoshi
教職歴25年。同校に赴任して7年目。3学年主任。

石川県立七尾高校
◎1899（明治32）年開校。2004年度からスーパーサイエンスハイスクールの指定校。
◎全日制／普通科・理数科／共学／1学年約240人
◎2011年度の合格実績（現浪計）◎国公立大は北海道大、名古屋大、京都大、大阪大などに135人が合格。私立大は早稲田大、同志社大などに延べ376人が合格。

伝えます。生徒は国数英それぞれに1時間は予習が必要だと実感し、家では3時間くらい勉強しなければと理解するのです」

4月下旬からは毎日、家庭学習時間調査を行う。毎朝、生徒は前日に家でいつ、何分、どの教科を学習したのか、就寝時刻と共に用紙に書き、担任に提出する。担任は一人ひとりのデータをパソコンに入力し、コメントを書いて放課後までに生徒に返却する。蓄積したデータは、個人、クラス、学年といろいろな形で集計でき、生徒個別の学習時間の推移、各学級の学習時間の比較などにも加工できる。データは生徒への声掛けや面談に利用する。校内のパソコンはLANで結ばれ、教師は全ての生徒のデータを見られる。教務主任の大西誠先生は毎日の蓄積があるからこそ指導に生かせると話す。

「毎日入力していると、学習時間が減ったら悩みでもあるのではないか、教科が偏っていれば不得意教科から逃げているのではないかと、生徒の課題が見えます。また、グラフ化することで生徒の意識は高まり、徐々に学習時間は増えていきました。今ではどの生徒も家庭学習の目標時間は達成しています。しかし、今度は時間は十分なのに成績の伸びない生徒の指導が課題として浮上したのです」

学習時間は確保されているのに学力が伸びない要因はどこにあるのか。その課題への答えを探そうと、毎日の学習時間調査にプラスして2か月に1度行っている生活・学習実態調査を工夫した。

調査内容は、1日の時間の使い方（平日・休日の教科別学習時間、起床・就寝時刻など）、学習に対する意識（定期考査対策の開始日など）、志望校の有無などである。学習に対する意識を尋ねる項目は、教科ごとに具体的な悩みを推測して選択肢を練った。回答からは生徒の学習の質を把握し、面談につなげるようにした。石田先生は面談の質が確実に上がったと話す。

「これまでは面談の中で悩みを聞き出してから助言をしていたため時間がかかっていましたが、調査によってすぐに核心に入れるので話をより掘り下げられ、アドバイスの幅も広がりました」

きめ細かな生徒把握により指導の質向上を図る

11年度は新たな試みとして、調査結果を基に面談で教師がどんな指導をしたのか記録する欄を結果データに設けた。これを蓄積し、同様の回答をした生徒の指導に役立てようという考えだ。

「課題別に指導を体系化できれば、学習の質を上げていくことが可能ではないかと、期待しています」（石田先生）

調査結果から同じ課題を持つ生徒が多いと分かれば、学年全体、学校全体ですぐに対策を立てることが可能となった。11月の調査で1・2年生では「学習の仕方が分からない」という回答が多かったため、放課後に3日間、学習法をテーマに教科担当による面談を行った。1年生は生徒個別に、2年生はLHRで用紙を配布して分からないことを書かせ、それを教科担当が見て、必要な生徒に面談をした。後日、再調査をすると「学習方法が分からない」と回答した生徒が各教科で40～60人減った。

「課題が明確に数値で表れるので、対策を立てようとした時に教師間の合意を得られやすいという利点もあります」（大西先生）

調査結果は個人票に打ち出し、三者面談にも活用している。

「生徒が抱える課題の原因は何かを、保護者に調査結果を示しながら話を進められます。子どもの書いた内容ですから、保護者は納得して話を聞いてくれます。成績が下がっている理由はこの教科の学習時間が減っていることにあるのではないか、家庭での様子はどうかと、具体的な話が出来、家庭の協力も得られやすくなったと感じています」（中澤先生）

調査を頻繁に行う理由を、石田先生は次のように説明する。

「生徒の実態調査とよく言いますが、今の生徒の姿は私たちの指導の表れです。調査は教師の指導の成果を検証する場と捉え、調査結果は次の指導に生かすよう、PDCAサイクルを回していきたいと思います」（石田先生）

課題には狙いと注意点を明記し、意識を高める

調査を通して分かった生徒の気質を生かした取り組みも始めた。

「本校の生徒は、自分が納得をしないと動かず、納得さえすれば背伸びをしてでも達成しようと頑張ります。そこで、学年集会で話す時や配布するプリントにも、その取り組みにどんな意味があるのか、目的や狙いを明確に伝えるようにしています」

週末課題では、教科ごとに、狙い、注意点、時間配分の目安を明記し、生徒に配布している（**図**）。

「1年生から何事においても狙いを明確に伝えるように努めてきましたが、その成果もあり、3年生になって、生徒が物事の意味をよく考えるようになったと感じます。3年生対象の添削課題を見ても、思考力や記述力に結び付いていると思います」（中澤先生）

定期考査では、各設問の狙いを明確にして作問し、試験終了後に正答率や平均点などから、狙いは達成できたのか、教科指導の自己分析をA4用紙1枚にまとめて、問題用紙と共に校長に提出する。

「今まで感覚的に捉えていたことを明文化し、狙いや生徒の抱える課題をより意識して授業を行うようにしています。また、授業や課題での指導の成果を確認できるような作問を行っていくことも方針としています」（大西先生）

このように、同校では一つの実践で完結させず、実践から新たな課題と目標を見いだす目標形成型の指導に転換しつつあるのだ。

図　週末課題の狙いと注意点、時間配分の一覧（2年生文系）

教科	科目	狙い	内容	時間配分	提出先
国語	古典	読解力養成。基礎基本の復習	『応用古典』古文「15『増鏡』」、漢文「19『戦国策』」※しっかり読解しながら、未習得の文法事項、句法を覚えること	20分・20分	担当者
国語	現代文	読解力養成。基礎基本の復習	『現代文長文演習』「小説 7『おしゃれ童子』」※取りかかりは「迅速に」、演習は「じっくりと」、手を抜かないこと	20分	担当者
数学	数学Ⅱ	基礎基本の定着。模試に向けて実力強化	今週も指数関数・対数関数。A問題＋B問題orB問題＋C問題。1週間に1単元の復習。B・C問題は20〜30分考え、思考を巡らせること ※土曜講座でC問題に取り組み、解答・解説を行う	60分	数学Ⅱ担当者
英語		読解力アップ 文法の復習	冊子を仕上げる。長文問題は選択になっているので、表紙をよく読んで、選択しなさい。ただし、難関大志望の人は三問とも解くこと。文法問題で分からないところがあれば、質問するように	90分	英語R担当者
理科	生物Ⅰ	遺伝問題をマスターする！	プリント1枚（答えは次週の最初の授業で配布）	15分	授業後集める
地歴	世界史B	基礎基本を固める！	プリント1枚	30分	授業後集める

＊学校資料を基に編集部で作成

新課程での共通課題を契機に小中高連携を進める

今後は、小中学校との連携を推し進める予定だ。学習習慣や学習姿勢などの定着は、高校の指導だけでは限界があると考えるからだ。11年度は七尾市内の全小中学校に呼び掛け、公開授業を行った。研究テーマは「根拠と筋道を明らかにして考える力の育成」。新課程で小中高に共通して求められている言語活動や表現力の育成をテーマに掲げた公開授業が行われた。授業後には教科ごとに協議会を設け、小中高の教師が一堂に会して意見を述べ合った。

「小学1年生の担任の先生が国語の授業を見て、『授業に取り入れられる指導があった』と発言していました。小学校の先生が感じ取るものがあったのならば、中学校の先生方にも影響を与えられる部分があるかもしれない。高校が中学校の実態を知ることも重要ですが、高校のことをもっと知ってもらえるよう、次年度は他地域の小中学校にも声を掛けたいと考えています。また、石川県では、今後、団塊世代の大量退職に伴い、若手教師が増えていきます。新課程に対応した授業力の向上も課題となるでしょう。授業を見た他学校種の先生から指導してもらえることは、貴重な経験になると期待しています」（石田先生）

今号の視点

学部の枠を超えた連携で学生の視野を広げる大学・学部

学生にさまざまな気付きを促し、視野を広げさせるためには、どのような手法があるのだろうか。大学の特色を生かして、学部横断や地域連携による取り組みを進める大学・学部を紹介する。

他学部の科目履修や地域との連携が増加

主体性やコミュニケーション能力、チームワーク、協調性を磨いていく過程で、これまでに所属してきた集団とは傾向の異なる視点や志向性を持つ人々と交流することは有効である。

専門性を深める上でも、自分の専門領域に加えて、関連する周辺の領域や、他にも興味のある分野について学ぶことは、他分野から新たな着想を得たり、刺激を受けたりすることにつながるだろう。

こうした考えから、ここ数年、学生の視野を広げることを目的に、所属学部の科目だけでなく、他学部の科目も履修しやすくする制度を取り入れる大学が増えている（図1）。また、地域や行政などと連携して行う研究の場に、教育的な視点を加え、学生も参加させて多様な経験を積ませるケースもある。

こうした学びの機会は実際にどのようなものか。それを学生はどのように活用し、どんな気付きを得ているのか。2つの大学の事例から探る。

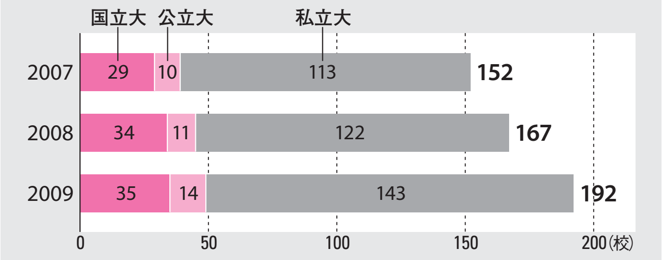
学部・学年を超えた交流で刺激し合いながら学びを深める

早稲田大「全学共通副専攻」

◎課題意識と狙い

早稲田大は、学部の枠を超えた多様な学びを学生に提供するため、2000年に「オープン教育センター」（以下、センター）を立ち上げ、同センターを中心に各学部が提供する全学部共通の「オープン科目」を設けた。大学院環境・エネルギー研究科の友成（ともなり）真一教授は、その特徴を次のように話す。

図1 学部段階において主専攻・副専攻制を導入する大学数の推移



＊大学院大学22大学（国立大4校、公立大2校、私立大16校）は対象としない
出典／文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」（2011）

「他学部の科目も履修できる場合、学部に元々設置されている科目を単に他学部生も履修できるというケースが多いと思いますが、本学では学部から独立したセンターが自由に科目を設定できるのが特徴です。教員は既存の学部体系に当てはまらない分野の授業を立ち上げることができ、それに魅力を感じた意欲的な学生が集まっています。そこから一種の化学反応が生じ、活気が生まれています」

11年度は、科目数は約4200、履修者数は延べ7万8000人に上る。しかし、これだけの科目をただ提示しても、学生は何を履修すればよいか見当を付けにくい。そこで、体系的に学べる仕組みとして、いくつかの科目をテーマごとに編成したのが、「全学共通副専攻」(07年度開始)だ。

◎取り組み内容

11年度の全学共通副専攻は22コース(**図2**)。16~24単位の範囲で指定された科目を修得するなど、一定の条件を満たせば副専攻として認定され、卒業時には修了証明書が発行される。修了論文や課題制作を必修にしたり、インターンシップを推奨したりするコースもある。コースにはそれぞれ、コーディネーターを務める教員3~8人が配置され、コースの運営や指定科目選定などを行う他、学生からの相談にも乗る。

指定科目の授業形式は、講義形式、少人数のゼミ形式、グループワークによるプレゼンテーションを中心にした授業までさまざまだ。環境をテーマにした「戦略的環境研究」のコースでは、友成教授担当の「環境を経営する」という科目が指定科目の一つであり、11年度は200人以上が履修している。授業では、履修者を約7人ずつに割り振って30チームをつくり、年2回ずつ発表させる。友成教授は、「学生が200人もの前で発表する機会は、他の授業ではまずありません」と話す。環境を「我々を取り巻く世界すべて」と定義し、発表テーマは学生が自由に決める。中には「居酒屋のトイレ学」などユニークなものもあるという。

副専攻の科目の中心を占めるオープン科目は、学部や学年に関係なく履修できるため、他学部や他学年の学生から刺激を受ける機会にもなっている。

文化構想学部3年の石川綺香(あやか)さんは、「高校時代に地学が好きで環境に興味があったことから、『戦略的環境研究』を副専攻に選びました。授業では全く面識のなかった4年生と一緒のチームになり、多様な考え方を学べました」と話す。

政治経済学部3年の岡本絵理さんも、「私は講義形式の授業が好きで、グループで意見を交わすような授業は苦手でした。でも、2年生で受けた授業ではチーム内に上級生が多く、『岡本さんはどう思う?』とサポートしてくれたため、自分から意見を言えるようになっていきました。更に、副専攻の授業でボランティアをしている学生の話を聞き、私も東日本大震災でがれき撤去のボランティアに参加しました。さまざまな人から刺激を受け、何にでも挑戦してみようと思うようになり、フットワークが軽くなりました」と話す。

◎成果と課題

副専攻を修了した学生は、導入初年度には17人しかいなかったが、10年度は142人と、年々増加している。修了した学生の満足度は高い

図2　早稲田大 全学共通副専攻名の一覧

・EU・欧州統合研究	・戦略的環境研究
・イスラーム地域研究	・ソフトウェア学
・映画・映像	・台湾研究
・英語と異文化理解	・知財コミュニケーション
・オーストラリア研究	・地中海文化
・感性文化学・美学	・中国研究
・国際協力	・データ解析
・ことばの科学	・都市・地域研究
・コリア研究	・日本語教育学研究
・ジャーナリズム／メディア文化	・人間の生命科学
・社会貢献とボランティア	・平和学

各コースのテーマに応じたオープン科目が用意されている

が、アピール不足もあり学内に浸透しきっているとはいえない。

「副専攻での学びを生かして、自分の興味・関心の幅を広げた結果、海外の大学院に進学した学生もいます。しかし、副専攻を修了したことを就職に直結させることが出来るわけでもないため、もっとメリットをつくる必要があります。内発的な学びの手段としては効果的ですが、今後は学外での認知度を高めることが課題だと考えています」(友成教授)

地域連携プロジェクトで多様な視点を育む

岩手県立大　地域連携のプロジェクト

◎取り組み内容

地域との連携プロジェクトを起点として、学部横断型の学びを実践しているのが、98年に開学した岩手県立大だ。

同大学は、「実学・実践を通して県内の問題解決に資すること」を基本方針に掲げ、高齢化対策や震災復興プロジェクトなど、地域に密着した研究・教育活動を実践している。

ソフトウェア情報学部の佐々木淳准教授は、「私が担当する『情報システム構築学』は、現場で困っていることをＩＣＴで解決する講座です。学生が現場を訪れて気付いた課題の解決に取り組ませようと、社会福祉施設を見学したり、農産物の産地を歩いたりしています」と語る。

代表的な取り組みの一つは、一人暮らしの高齢者の見守り体制の構築だ。00年に同県の旧川井村（現宮古市）と連携して始まったプロジェクトで、現在は県が支援する活動となっている。

旧川井村は、東京23区とほぼ同じ面積に住民は約３０００人という過疎地域で、65歳以上の高齢者人口が40％を超える。社会福祉学部福祉経営学科の小川晃子教授は、村に住む高齢者単身世帯の見守り体制の構築を研究テーマとし、04年度から電話による安否確認を始めた。しかし、村の社会福祉協議会の負担増という問題が浮上したため、ＩＣＴが専門の佐々木准教授に相談。その結果、学部生の教育も含めた学部横断的なプロジェクトへと発展させた。

佐々木准教授は、「社会福祉学部とソフトウェア情報学部の学生を現地での聞き取り調査に連れて行き、どうすればＩＣＴで支援できるか議論させました。学生にはヒントを出すにとどめ、自分たちで考えさせました」と話す。社会福祉学部の学生がまとめた、固定電話を使った簡易インターネットサービス「Ｌモード」を活用したシステムの構想に対し、ソフトウェア情報学部の学生が画面の設計、プログラミングなどを行い、システムをつくり上げた。

その後も、両学部の学生が現地の高齢者に聞き取り調査をし、課題を発見して解決方法を検討し、システムを改善するというＰＤＣＡサイクルを回し続けている。このプロジェクトは、07年に日経地域情報化大賞の日本経済新聞賞を受けるほど内外から高い評価を得た。

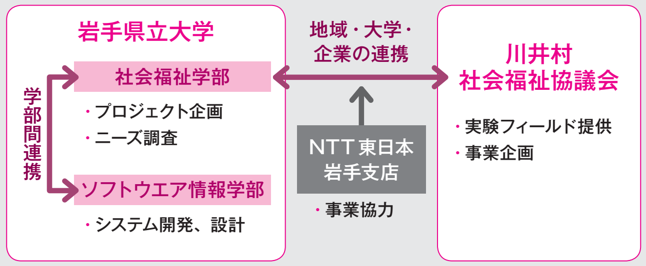
10年３月のＬモードサービスの廃止に伴う対応にも、両学部で連携して取り組んだ。ソフトウェア情報学部の学生はＬモードに代わる端末を開発し、社会福祉学部の学生と共に現地に赴き、試作品を高齢者に試してもらった。調査の結果、最も評判の良かった電話機を使い、ダイヤル式黒電話からの発信にも自動対応できる安否確認システムを構築した。

この他にもソフトウェア情報学部と盛岡短期大学部生活科学科の連携など、大学全体で学部横断プロジェクトが進んでいる。

◎成果と課題

プロジェクトでは、社会福祉学部とソフトウェア情報学部の学生が参加し、現地での調査や会議で何度も顔を合わせる。これは、互いの視点や考え方の違いに刺激を受けるよい機会となっているようだ。

図３　岩手県立大　旧川井村のプロジェクトの連携関係



自治体と協力し、地域のニーズを把握し、プロジェクト企画を立案。企業と協力しながら、システム開発（試行版）を行う。この過程で、学生は現場を経験し、互いの学部から見た課題解決の視点を知る　＊同大学の資料を基に編集部で作成

小川教授は、「社会福祉学部の学生は相手の心を大切にする志向が強くあります。しかし、それだけでは主観に流されて、客観的なプロジェクト運用が出来ません。例えば、サービスの自己評価には客観性や科学性が必要です。ソフトウェア情報学部の学生と交流することによって、プロジェクトの科学的な運用の仕方などを学んでいます」と話す。社会福祉学研究科修士課程１年の青澤希さんは、「プロジェクトに

学生VOICE

先輩の行動力から多くの刺激を受けた

早稲田大
政治経済学部経済学科3年
打樋(うてび)紗也加
(徳島県立富岡東高校卒業)

私は高校生の頃から環境に興味がありました。大学では環境経済学を学びたいと思いましたが、学部の授業だけでは学べる範囲が限られていました。そこで、2年生から副専攻の「戦略的環境研究」の履修を始めました。

副専攻の授業はグループディスカッションをよく行います。最初は資料の作り方やプレゼンテーションの仕方が全く分かりませんでしたが、同じグループの3、4年生のプレゼンテーションを手本としました。また、先輩の中には「来週、中国に行ってくる」と突然出掛けてしまうフットワークの軽い人もいます。私もそうした先輩の行動力に影響され、環境関連の国際会議が名古屋で開かれると知った時には、その3日後に友だちと2人で名古屋を訪れ、会場で多くのものを得る経験をしました。

私は数学が好きなので経済理論を学ぶ学部の授業にも関心があります。副専攻の授業は、遊びというと誤解もありますが、いろいろな人と話したり、体験したりしながら、知識と教養を身に付け、学べる楽しさがあります。

社会福祉の現場に立ち、利用者第一の視点に転換

岩手県立大
ソフトウェア情報学研究科
修士課程2年
菊池卓秀
(岩手県立大船渡高校卒業)

私は地域に深くかかわるような勉強をしようと、高齢者の安否確認システムを手がける佐々木研究室に2年生の時に入りました。3年生から旧川井村のプロジェクトに携わり、社会福祉学部の学生と一緒に泊り込みでLモードのサービス終了に伴う現地調査を行いました。タッチパネルやテレビなどの端末を用意し、高齢者に使用感を調査したのです。高齢者に聞き取り調査をするといっても、最初はどう話せばよいのか分からず、社会福祉学部の学生の様子を参考にしました。彼らは普段から多くの人と接していて、コミュニケーションが上手だったからです。

高齢者の方々の評価が最も高かったのは電話機でした。私たち学生はタッチパネル式が断然便利だと予想していましたが、全く違う結果に、使う側の意見を大切にする重要性を痛感しました。かつてはソフトウェアの機能を突き詰めることを優先して考えていましたが、今では利用者第一に考えられるようになりました。これが最も自分が変わった点だと思います。

ソフトウェア情報学部の学生が参加していることで、技術の有無によって支援可能な範囲が大きく左右されることを痛感しました。私もソフトウェアに興味を持ったので、情報システムの大学院に進学したいと考えたこともありました」と話す。

一方、ソフトウェア情報学部の学生は、現地調査でのコミュニケーションの取り方などを社会福祉学部の学生から学ぶそうだ。更には、自分がつくりたいものではなく、現場が必要とするシステムを開発しようとする志向が高まるという。一方で課題もある。

「現場に連れて行くと現場を重視するようになりますが、技術がなければ課題解決はできません。先端技術にも目を向けさせ、バランスの取れた技術者を育成していきたいと考えています」(佐々木准教授)

進路指導に生かす

単発イベントではなく、長期的かどうかが鍵

大学にはサークルやボランティア活動など、授業以外にも刺激を受ける機会はたくさんある。今回紹介した二つの大学は、学問を通して刺激を受ける機会を設けることで、学生の視野を広げているといえる。主専攻以外の知識を得るだけでなく、自分とは異なる視点から課題を発見したり、その解決のためのプロジェクトを運用したりしていく力を磨く場にもなっている。

また、単発的なイベントではなく、体系的に学べる仕組みづくりや、長期的な研究と教育の連動があることによって、学問的な深まりも担保されている。

「学びたい内容」に関連する主専攻が大学・学部選びの主軸になるのは言うまでもない。今回のような学習機会の有無は副次的な要素だ。だが、大学がどういう方針で、どのような学生を育成しようとしているか、大学の姿勢を推し量る材料になる。このような機会が用意されているかどうか、確認しておくとよいだろう。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

読者のページ

VIEW'S SQUARE Volume 5

教育最前線からのホットな話題を紹介します

生徒の志望を引き出し、育てることの重要性

10月号の特集「学力を伸ばし、志望を深める志望校検討会」を読み、課題整理にあった「志望を育てる」意識が、今の進路指導に最も必要だと感じた。学校事例の2校には、それが共通点としてあると思う。生徒の多くは、進路に関してのレディネスを持って高校に入学していない。それを引き出して育てることは教育の原点でもあり、志望校検討会がその視点で進められれば、良い結果を生み出すと容易に想像できる。大変な作業だが、「育てる」観点から出発すれば、進路指導で教師に求められる力は何かも浮かび上がってくると思う。

［埼玉県立不動岡高校・久保島昌二］

熱い思いと実行力を実感

10月号「指導変革の軌跡」の逗子開成中学・高校の取り組みは、管理職の強力なリーダーシップにより改革を推進した例だと思う。「確信を持って取り組んでいるというよりも、良い学校にしたいという情熱だけで動いていた」という言葉に、取り組みの勢いと先生方の実行力を感じた。マイナス面ばかりを指摘して、転ばぬ先の杖をつこうとするのではなく、ビジョンをすぐに行動に移していける雰囲気はうらやましい限りである。また、実力試験の作問に他学年の教師がかかわるという手法は斬新で、面白い発想だと思った。

［滋賀県立守山中学・高校・堀浩司］

「地域の子どもを地域で育てる」視点が大切に

12月号の特集「高校間連携」は、平成の大合併が行われた時から必要性を感じていた。少子化の影響で学校規模が徐々に縮小する中、教師は孤立し、生徒の切磋琢磨する機会は減少している。福井県・嶺南地域の「学校の違い」を活力にする事例は大きなヒントになった。各校は特色を生かしながら生徒を伸ばす努力をしているが、学校間連携は有志で話しているだけでは広がりにくい。学校の統合再編により、地域での連携はますます困難になっているが、今回の「小論文」のように共通のテーマから連携を始めることは、学校間の垣根を低くし、学校力を高めることになると感じた。「地域の子どもを地域で育てる」発想で是非実現したいと思う。

［徳島県・匿名希望］

努力の継続の先に成果がある

12月号「指導変革の軌跡」の石川県立小松高校では、実績を上げている学校は努力を継続していることがよく分かった。中でも、学年集会は年間計画を立て、時期に応じたテーマで行うことが効果的だと改めて認識した。「手を掛けるほど生徒は伸びる」のは確かだが、手の掛け方は気になるところだ。単に課題を与えて点検するだけでなく、内発的な動機付けを行いながら、生徒の学力向上に適した教材を作り、評価することこそが大切だ。学校全体で、どの時期にどの教科を重点的に学習すべきかを言えることが、教師の意識が一つの方向に向いている学校の証しだと思う。［福井県立高志高校・田中宏明］

教師川柳

被災地の 希望をつなぐ 人づくり

福島県・臥煙

『VIEW21』臨時増刊号

「グローバル時代を生きる高校生を育てる」発刊のお知らせ

3月上旬頃に発刊予定です

＊タイトルは変更する可能性があります

2012 Extra Edition

VIEW21 2012 April 4月 Volume 1

次号は 4月2日発行（予定）

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

編集後記

２か月後には高校で数学と理科が新課程先行実施となります。中学校の内容はどの程度定着しているのか、１年生の指導は従来通りで良いのか、今号では先行してこのテーマを先生方と共に考えました。先生方にご意見をうかがう中で、「今回の課程は教師が試される課程だ」と口々に言われていたのが印象的でした。各校でも準備を進められていると思いますが、ぜひ編集部にも学校の様子をお知らせください。（小林）

VIEW21 2月号 Vol.6　2012年2月8日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　（株）ビーヴィオコーポレーション
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸満、二宮良太、山口慎治
撮影協力　荒川潤、川上一生、ヤマグチイッキ
イラスト協力　山本重也

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
電話　03-5320-1287

©Benesse Corporation 2012